

325

537

6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6

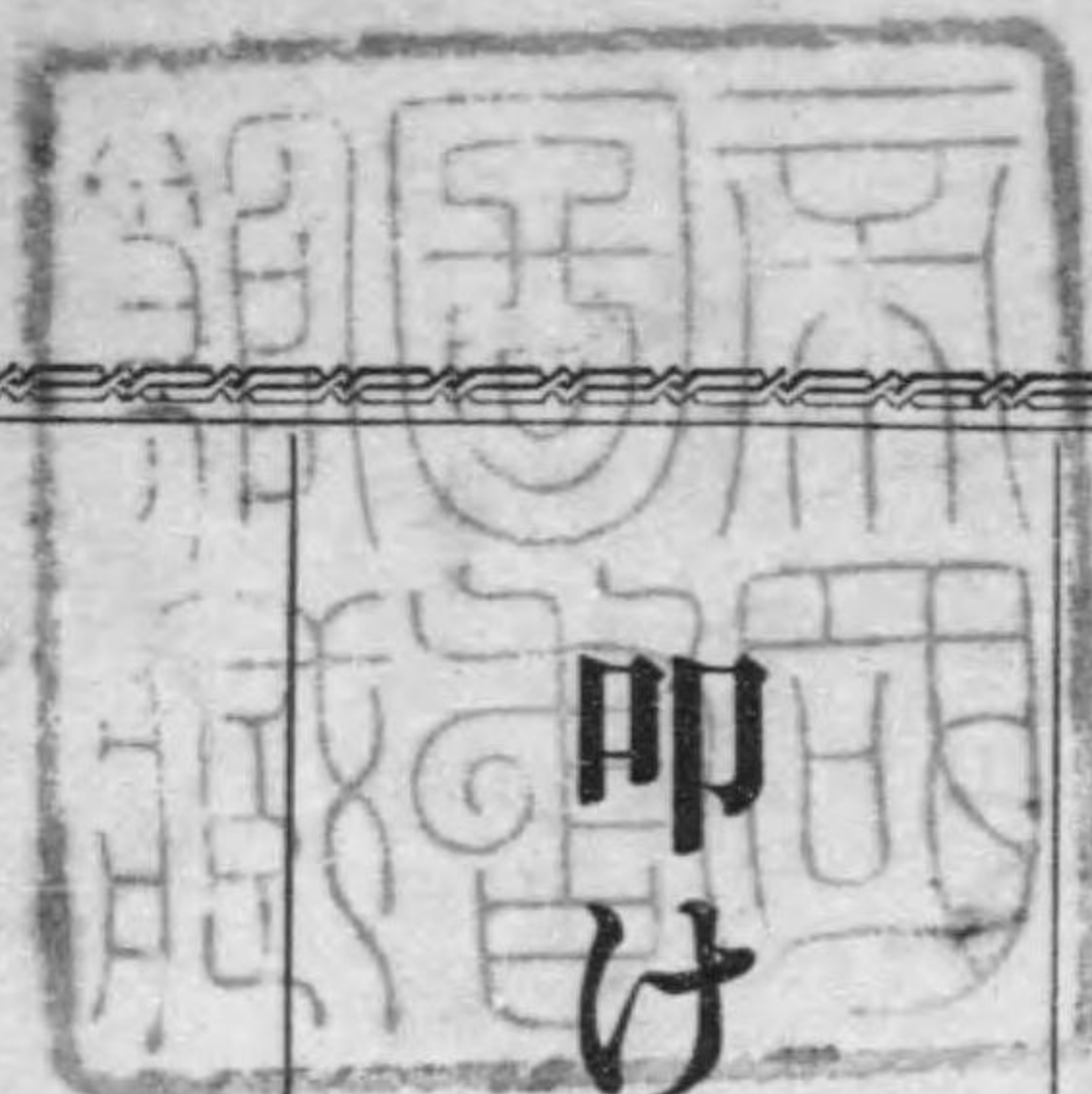
始



36.1215

21192

325-537



釋
宗
演
著

叩
け
よ
開
か
れ
ん

日本圖書出版
株式會社經營

小西書店發行

大正
8 4 8
内交

叩げよ開かれん

目次

平等觀と差別觀……………一

一 天地は一大連鎖である……………一

即身即佛——四河海に歸すれば同一鹹味——平等思想は破壊思想

二 差別觀に入つて始めて困難……………四

花は紅の柳は綠——履は足に穿く可きもの——人倫道德の缺く可からざる所以——我
見の平等に囚はるゝ勿れ——縱横無礙の活動

三 理に順つて心を起せ……………五

理の顯現は秩序——秩序の體は差別——亂臣賊子なる勿れ

禪とは何ぞや……………七

一 禪は心なり……………七

心さ云ふも動ける心に非ず——正思惟——靜慮——算盤珠を弾くところにも禪がある——長明常盤津にも禪がある

二人は麴のみに生きず……………九

耶蘇の戦ひ——釋迦の戦ひ——佛が勝つか魔が勝つか——教祖は悉く座禪せり

三大休息の處に……………一三

能く働き能く休む——止めて止めざる處に安住せよ——形にのみ囚はるゝ勿れ

精神的大燈明を點ぜよ……………一六

一人間は我身の解らぬ者……………一六

鷄までが欠伸ばかりを——隻手の聲——一念よく三千世界を透過す——自利觀と利他觀

二畜生に見る可き點あり……………一九

清淨無垢の光明燈あるを知らず

三闇は帚で掃き出されぬ……………二二

大智度論に載れる比喻——煩惱の犬は逐へども去らず——自心の闇黒を照らせ

趙州和尚の機鋒……………二四

一念じ來つて寂々親し……………二四

趙州石橋の話——禪宗の特色

二雲は青天に在り水は瓶に在り……………二五

李朝と藥山の商量——汝何ぞ耳をのみ尊ぶ——佛教嫡々の道理——李朝の偏

三如何なるか是れ石橋……………二七

與奪自在の活作略——汝略約を見て石橋を見ず——驢を渡し馬を渡す

四如何なるか是れ大善知識……………二九

外來底——又一點あり——墻外底——大道長安に通る

五灌溪と趙州との機鋒……………三一

孤危険峻の手段——海に入ては須らく巨艦を釣る可し

眞風度篇……………三四

一變らぬ物と變る物……………三四

體と用と——青山動かす白雲去來す——山岡鐵舟の歌——吾が宗旨の着眼點

二體と用とは形と影の如し……………三七

孫子の語——平時と戦時と——文事あるものは必ず武備あり

三 平和の政策と準備……………三六
 何物にも特色あり——亞米利加の流行語——世界人類の理想

四 歐米の國民性……………三九
 獨逸の今日ある所以——英國人の氣質——遅くも春は來にけり牛の年

五 對岸の火災視する勿れ……………四二
 輸出の超過に有頂天なる——我國の名物

六 忠君の一大精神……………四四
 我國は皇室あつて臣民あり——疎漫なる個人主義を排す——誤られたる説の害毒——昔の武士氣質

七 國民道德を如何にせん……………四七
 島國根性を除け——永遠の信用を顧みよ——實業道德を振興せよ——宗教的信仰を要す

八 自問自答せよ……………四八
 統一されたる國民精神——天台の一心三觀——眞言の阿字本不生——日蓮宗の皆歸妙法——淨土宗の攝取不捨——我さは何ぞや

極處に一線道を求めよ……………五〇

一 徒らに新を説く勿れ……………五〇
 我國は神ながらの國——國民としての大自覺を要す——活潑々地の活動をなせ

二 はゆる絶對に到れ……………五一
 相對的思想を取り除け——一心に信仰して始めて功德現はる

三 物に轉せらるゝな……………五三
 禪を學んで禪に轉せらるゝ勿れ——虎頭に乗て虎尾を收むるの力量を養へ

四 極處に一線道を得よ……………五四
 盜みの秘傳——一生懸命の工夫——極處は絶體なり

五 自己の心田を開發せよ……………五五
 自己に向て自己を求めよ——自心に秘める光明を發見せよ

力 用……………五五

一 力は即ち用也……………五五
 力の意義——精神的力量——力は生命なり

二 我宗に一法の施すなし……………五八
 經論なく言句なし——粗詰細語も所依の經典——溪聲鳥語も佛陀の説法

目次……………五

三禪は力を養成するもの……………五九
 智仁勇と戒定慧——手には手の力あり——足には足の力あり——禪は腹の力——松風を齧て聞く——人間活動の原力

四大和民族の精華……………六一
 偉大なる勇猛心——武士道の本領

五力の究極は慈悲なり……………六二
 坐禪の副産物——禪の本旨——小兒は泣くを以て力みなす——菩薩は慈悲心を以て力みなす

叩けよ開かれん……………六四

一向上の一路……………六五
 此垣一重が頑鐵の——香殿禪師撃竹の音を聞いて悟る——麴を求むる者に蛇卵を與へんや

二逆境は人を作る……………六六
 艱難汝を玉にす——順境は人を殺す——カーネギーの奮闘——我が國運の今に到れる所以

三瘦我慢を去れ……………七〇

過て改むるに憚る勿れ——悔悟の遲速は人物の大小に依て分る

四信仰は知識の極度……………七三
 生死の流れを渡る舟筏——人をして活動せしむる大元動力——信仰は宗教によつて得

五食はんか船……………七五
 旅は道伴れ世は情け——老若男女力を一にして進め

六境遇に感謝せよ……………七六
 人生一日も喜神なかるべからず——希臘の神話——人は心の持ち方で

七極樂浄土に導く光明……………八二
 人生に希望なかるべからず——古歌一首——樂しく愉快なる生活

婦人と參禪……………八三
 信仰なるかな——公案は之を日常行爲の發源地となせ——婦人相應の事業に力を
 注げ

隠れたる徳行……………八六

一大功德は無功德に同じ……………八六

積善と隱徳——達磨大師と梁の武帝——太陽の大功德
 二 隱徳を冥々の中に積め……………八八
 教祖の教祖たる所以——楠公の赤心——北條時頼の行脚——マシントンの謙讓——名人巨匠の心懸
 三 伊勢の畫僧月僊……………九一
 遊女の腰巻に描く——謝金を足に載せて渡す

誠の心……………九三

一 自ら欺かざれ……………九三
 明治天皇の御製——菅公の作——欺かざる心——日々吾身を三省す
 二 心は明鏡臺の如し……………九五
 夜もすがら佛の道を求むれば——敵を愛せよ——親の恩——佛菩薩の慈悲
 三 死は刹那の安息……………九七
 生死は晝夜の如し——生命の價値——人生の意義——堅固なる宗教的信仰に生きよ
 四 宗教は厭世的のものに非ず……………九九
 宗教とは誠の教へである——出世間的にして大に現實的なり——大勇猛心は宗教的

仰によりて得らる

五 唯だ誠の心を發せ……………一〇〇
 四大假和合の身——有爲轉變は古今の常規——宇宙の大精神に合致せよ
 六 穢土其儘が淨土……………一〇一
 人は萬物の靈長——宗教の必要なる所以——楽しみは夕顔棚の下涼み——汚れた此身其儘が佛身

衲が座右の銘……………一〇四

一 與へる者と受ける者……………一〇四
 座右銘——偉人には必ず家訓あり——衲のは元々内密に拵へたもの
 二 事業の成否は出發點にあり……………一〇八
 早起は成功の一要素——千里の道も一歩より始まる——徳川家康公の教訓——天海僧正の教訓——吾物と思へば輕し笠の雪——汝等諸人十二時か使へ
 三 宇宙と我との合致……………一一六
 靜座と動座——萬境に對して心を動かさず——神も佛も我心に現はる
 四 敬虔熱烈なる信仰心……………一二九

朝の太陽を拜す——一知半解の相対的智識——外形の問題に非ず精神上の問題なり
——明治天皇の御教訓——宜しく身を以て示せ——糞土をして光明赫々たらしむ——
西行の咏

五我は社會の一分子……………二四

我が一身は我有にして我有に非ず——道德心ある者は宗教心あり——金持になる順當
の手段

六千萬人と雖も吾れ行かむ……………二五

畏れ慎め——萎縮する勿れ——勇氣

七尋常苟も言はず……………二七

言は行ひを顧み行ひは言を顧みる——修養の極致

八機に臨みて讓る勿れ……………二八

疾風迅雷的に機會を捉へよ——輕々に事を爲して失策を招く勿れ

九精神的に生存を續けよ……………二九

北條時宗と佛光國師——古聖賢は精神上に生きて居る

十大丈夫の氣を負ひ小兒の心を懷け……………三二

覺性を有すれば女も男なり——山岡鐵舟の一言——小兒に對しては學者も理窟が説け
ぬ——南洲翁の教訓

十一何事も思ひ煩ふ勿れ……………三三

寢に就いて妄想を描く勿れ——得を離るゝ履を脱するが如くせよ

貧富何かあらん……………三四

一滿天富の蒸發氣……………三五

富の力——天下悉く富の爲めに眩せらる

二富は恰も利刀の如し……………三六

使用者の如何による——物質的に貧なりとも精神的に富め

三道は貧道より貴きはなし……………三六

濁富と濁貧——貧の味——胸中の閑日月

四光風霽月に樂め……………四〇

天空海潮的の氣分を養へ——貧しきものは幸ひなり

汝が心を制せよ……………四二

一心は毒蛇惡獸の如し……………四二

佛道教經に曰く——正義正道の欲——亂心狂意を制伏せよ——一切の對境を忘絶せよ

二 瑞巖和尚の自警……………一四三

主人公く——慍々着く——心こそ心迷はず心なれ——宗教的力用

三 心は主なり欲は従なり……………一四五

人身は欲の容れ物——欲とは如何なるものぞ——我欲あるが故に道を爲す——欲には善惡の二面あり——活人劍殺人刀——罪惡の蔭には女あり——罪惡の蔭には男あり

四 菩提の靈光……………一四九

心を修むる方法——智慧の光を以て妄想の迷を照破す——直指人心見性成佛——迷ひの心が悟の大佛心——盜人を捉へて見れば我子なり

五 生まれぬ先の面魂……………一五〇

不思善不思惡——聖道門と淨土門——通心徹心自他一如——五欲七情は小兒の喧嘩の如し

男女の鬭争……………一五三

一 物騒な世の中……………一五三

世界の氣勢は個性を重んず——儒教の絶對服従は力説の効なからん

二 推移と破壊との別……………一五四

君子は世を推移す——推移の氣勢を善導するに努めよ——女は絶對服従を強ふ可からず

三 相互に義務がある……………一五八

個性の發揮と放縱との別——佛教道德は相互的である

四 三十一文字の喧嘩……………一五九

猶も焼餅をやくたいも無き——又しても又あく性を描鉢の——この嫌めも早う死なぬか——時鳥啼きつる嫌は命長し——勘忍するが家の福德——何事も我をあやまり願ひて

十方世界これ全身……………一六〇

一 先づ大に考ふ可し……………一六〇

百尺竿頭不動の人——百尺竿頭須らく歩を進むべし

二 生何ぞ死何ぞ……………一六二

哲學及び宗教の目的——萬物の靈長たる所以——釋迦及び達磨の悟處——偉人は悉く靈氣に觸れたるもの

三 相摸太郎の膽力……………一六四

弟子即今大事到来せり——眞に獅子兒なり能く獅子吼す——最明寺入道末期の偈

四公案は一種の閑家具……………一六六

常識を外れたる事が禪に非ず——文殊菩薩と維摩居士——天地は指一本に歸す——公案によるが最も安全——奇麗サツパリと公案を忘却せよ

五自己の本源……………一六八

無念無想の境界——我れなるものゝ本源を悟れ——人々の職務上に活用せよ

六乾坤唯だ一人……………一七〇

天上天下唯我獨尊——生死の透脱は悟の第一歩——佛法に多義なし——活潑々地の働

禪機ごは何ぞ……………一七三

一囚はれざる平凡の生活……………一七三

極端と極端との合致——漢來らば漢——胡來らば胡——赤裸々——震堂々

二正と奇とを轉倒する勿れ……………一七五

常と變と——無化にして化す——徳山の棒——臨濟の喝——地獄に入るこゝさ矢よりも早し——影を追ひ形を逐うて何かせん

三萬機萬境悉く禪機……………一七六

禪者は佛祖の髓を得よ——頻りに小玉を呼べども元と無事——一休和尚と地獄太夫——禪機と俗機

溪聲これ長廣舌……………一八〇

一自力と他力……………一八〇

主觀的に入るか客觀的に歸するか

二真理の極致……………一八一

言詮不及意路不到——無門禪師の咏——日々是れ好日——古歌——人の振り見て我が振り直せ

三無言の說法……………一八四

一婦人賊を感化す——親鸞上人と山伏辨圓——門前の小僧習にぬ經を讀む

四藥山の提示……………一八六

智解情識を以て論ず可からず——來れよ救はん求めよ與へん——獅子座に陞つて一句なし——蘇東坡の詩

禪は一大事實也……………一八八

一 禪の定義.....一九八
 語黙兩途の關係——不立文字——宇宙の一大事實

二 一切の戲論を捨離せよ.....一九〇
 宇宙人生の根本意義——唯心——唯物——物心二元——愚昧及ぶ可からず——大信根
 を起せ——大勇猛心を起せ

三 工夫の極致.....一九二
 一大疑團——眞劍の工夫——廓然大悟の境地

法は破る可からず.....一九三

一 我身は我物に非ず.....一九三
 人事を盡くして天命を待つ——我身が我物にあらざる證據

二 豪いも貴いも無い.....一九四
 無限の立場から見下せば——兼好法師の徒然草

三 法は至大至高の力である.....一九五
 天に順へば榮え逆へば亡ぶ——非色非心の眞如

四 法は事物の本然である.....一九七

五 法は意想の外である.....一九九
 法は宇宙に彌蔓す——運命——諦め——横徑に踏み込んで苦む

支那漫遊所感.....二〇〇

一 南畫その儘の光景.....二〇〇
 洋々たる長江——青々たる楊柳——流石に大國

二 世界的競争の舞臺.....二〇一
 經濟的競争の中心——政治問題の源——日本人の責務

三 兩國を結合する連鎖.....二〇一
 日支親善——宗教的結合——布教の實を擧げよ

四 支那佛教の比較.....二〇四
 教理の研究と教義の宣傳——行持甚だ綿密——實社會に對する救濟事業

支那の宗教.....二〇六

一 不可解の國.....二〇六
 二 其の大なる點.....二〇七

面積——自然の天恵——人民
 三其の小なる點……………二〇八
 極端なる個人主義——亂雜なる教育——亂雜なる宗教
 四道教と孔子教……………二一〇
 兩教は極端に相違す——恬淡——無爲——禮儀三千威儀八百——兩教の利害
 五佛教の渡來……………二二三
 超世間にして入世間——佛教は二教を包有す——傳播——迫害——盛衰
 六三教の現状……………二三四
 詛譎辭章の學問——吉凶禍福の神——佛教の不振
 七將來の宗教……………二五六
 大業は盛徳に俟つ——時々勤めて拂拭せよ——本來無一物

目次終

叩けよ開かれん

釋宗演著

平等觀と差別觀

一 天地は一大連鎖である

即身即佛といつて、佛と人間とは同じものである。佛と人間とが同じものであるばかりでなく草木國土も、一切、佛である。これを譬へると、天地宇宙は一大連鎖であつて、固より其間に差別の有らう筈が無い。國家の歴史に就いて考察するも、個人の生涯に就いて觀察するも、進歩に進歩を重ねて、自覺の時代に到達すれば、直ちに人

平等觀と差別觀

一



心を指し、萬物の本源に立ち歸つて平等觀念を懐くやうになるのが當然である。國家が未だ自覺の時代に到達せないうちこそ、無暗に外國を恐れたり、無暗に外國の文明に心酔したりするが、一旦、自覺して國家興隆の機運に向ふと、國民擧つて平等觀念を懐き、自他兩國間の力に差別を認めない。神州には神州建國以來の正氣があつて決して他國人の窺ふことを許さない。西洋の文明何かあらんと云つたやうな調子になる。同時に、個人の間にも、平等觀念が旺盛になつて來て、匹夫の身を以て、一躍關白の榮位に上つた豊太閤の如きものを生じ、上下貴賤の差別が撤去されてしまふものである。ガルバルデーが猛烈起つて伊太利を統一したのも、また、此例である。ナポレオンが佛蘭西皇帝となつて威名全歐洲を風靡したのも此例である。維新の風雲に乗じて立つた元勳連中が、其の風雲に乗ずる動機となつたものは、即ち、此の平等觀念である。一個人の生涯に觀ても、矢張り、同じであつて、廿歳前後の青春期に達すると、智情意の三者が一進歩をなさうとする時で、國家が興隆の機運に向つた際と等し

く、多少、意久地のある青年は悉く、奮勵一番、我れも人なり彼れも人なりといふ平等觀念に支配されて、各自其の志望に向つて猛進するやうなものである。あゝ、四河海に歸すれば同一鹹味、四姓佛に歸すれば同一釋氏であること云つて、釋尊も四十九年間、三百餘會の説法をされた其の最初に於て此の平等思想を唱道されたのである。化學者は物質の元素を唯だ一の電子に歸してしまふが、宇宙は一金萬器、同じ一つの金が種々雑多の器物に千變萬化して居るのである。故に、思索の歩を進め極めて本源に到達すると、必ずや、平等觀に歸してしまふのである。然れども、平等思想は、原始的の思想であつて、何方かと云へば破壊思想であるから、此の思想に到達するのは決して困難事ではない、易々たるものである。敢て智者天才に待つまでもなく、凡才の能くし得るところである。唯だ差別觀に入るに至つて、始めて、大なる智慮を要し、多くの經驗を要する。従つて、智者天才に待たねばならぬものが多々あるのである。

二 差別観に入て始めて困難

斯く人は平等観に達するのは易々たるものがあるが、差別観に入るに至つて、始めて、困難事に遭遇する。「花は紅、柳は緑」、これが人間の差別観である。前にも云つた通り、天地宇宙は一大連鎖であつて、差別のあらう筈が無いが、併しながら、分つて見れば、一つ一つの單鎖が連結したものである。天地の存する限り、宇宙のあらん限り、差別を無くする譯けには行かない。凡そ、人間に平等観念ばかりであつて、差別観念がなかつたならば、世間は如何に闇黒なるものであらうか。猛獸相撃つが如き亂雑の状態に陥ることは火を睹るよりも明かな事實である。履は足に穿く可きもので、頭に戴く可きものではない。冠は頭に戴く可きもので、足に穿く可きものではない。社會は無差別では、到底、存立し得られないのである。人倫道德が社會に缺く可からざる所以は、まことに茲にある。差別を無くするのは鎖の連結を無くすると同一

であつて、社會其物も、また、無くなつてしまふのである。だから、たとひ、微少の差別が亂れても、直ちに宇宙全體の組織に狂ひを生ずることゝなる。平等と言つても差別を離れて平等は存立しないと共に、差別といつても詮じ詰むれば平等に歸するのである。決して「我見」の平等に囚はれ「我見」の差別に囚はれてはならないのである。襦袍は寢衣に使用するか、家で燕居いで居る時に着て居るものである。これを着て禮儀の場所に出席し以て得々たるが如きは、これが、即ち「我見」に囚はれた平等である。仁義、禮智の枷に縛られて殺活自在底の活手段なきものも、また「我見」に囚はれた差別である。要は「我見」に囚はれて其の奴隸となることなく眞の平等、眞の差別の上に身を置き、全くの「無我の愛」を持して、縦横無礙の活動をなさねばならぬ。

三 理に順つて心を起せ

御經の中に、「理に順つて心を起せば善となり、理に逆らつて心を起せば悪となる」と云つてある。凡そ、理の顯現は秩序であつて、秩序の體は差別である。平等思想は大切のものであつて、人間に此の思想が無くなると、卑屈となり、無氣力となる。奮發心も起らねば向上心もなくなつてしまふ。唯だ動いて居る形骸たるに止まるのであるが、さりどて、差別の大切なることを認めず、秩序を亂し、人倫に反いて得たりとなすが如きものは、これを亂臣賊子と云はねばならぬ。曾て、歐洲に行はれた帝王神權説の如きは、「我見」に囚はれて平等を無視し、差別を顛倒したる邪説に外ならぬが社會主義の如く、社會の秩序を蔑如し、人倫を顧みず、冠を足に穿き履を頭に戴いて平等なりと心得居る如き思想も、また、帝王神權説と同じく、理に逆らふ我見たるに過ぎない。世の青年たるものは、よろしく、此の悪平等、悪差別の邪説に迷はざるゝことなく、平等思想を土臺とせる差別觀に入り、「無我の愛」に入つて能く「唯我獨尊」の見地に立つの心がけを忘れてはならぬ。「我見」と「唯我獨尊」とは猫と虎との如く

似て居つて、更に大なる差違がある。悪平等に囚はれて亂臣賊子となり、差別を無視して理に逆ふ背徳漢となる如きは、猫を描いて虎に類すと云はんよりは、猫を描いて犬に類するよりも、一層、甚しきものである。國家としても、國民としても、一私人としても、此の平等思想を持して平等思想に囚はれず、此の差別觀を守つて差別觀の奴隷となることなく、秩序嚴格にして一視同仁の主義を忘るゝことなければ、常に優勝者の地位に在つて殺活自在の働きがなし得らるゝのである。

禪とは何んぞや

一 禪は心なり

禪とは何んぞ。斯う云ふと、大抵の人は、佛教の中の一宗派、即ち、一つの宗派に

屬する坊さんが創めたものであると答へるであらう。無論、それに違ひはないが、併しなから、それに限られて居ると思ふと大きな間違ひである。歴史の上から言つても禪は佛以前からあつたもので、達磨大師が始めて之れを考へ出したものでもないのである。印度には、達磨大師よりも釋迦如來よりも、もつと以前からあつたものである。彼の波羅門教の中のベダンタ、ヨーガと云ふやうな宗旨は、先づ禪宗と云つてもよいので、禪を以て本意としてをつたものである。歴史の上から考へて見ると、禪は佛教以前に既に存在して居つたのである。獨り波羅門のみならず、マホメット教や耶蘇教の中にも禪味はあるのである。然しながら、我々の唱道して居る達磨禪とは些か違ふ。似たところがあるのである。尙ほ、これらの宗教に於てのみでなく、古聖古賢の説かれた哲學的・道德的の教へには、皆、禪的の意味が含まれて居るのである。

扱て、然らば、禪とは如何なるものであるか。曰く、禪は心なりちや。然しながら動いて居る心ではない。心と云つても其の意味は甚だ廣い。強いて言はゞ、心の本體

なりとでも云はうか。此の心と云ふものを換言すると、古來云ふ妄想的考へではなく正思惟、即ち、靜慮と云つて宜しい。あらゆる哲學、宗教、倫理の中に、斯かる禪が含まれて居ると云つたところで、決して、専門的の禪を云つたのではない。斯う考へて見ると、成程、古人の云つた如來禪もあれば、菩薩禪もある。如來禪や菩薩禪があるばかりでなく、學者には學者禪がある。凡夫には凡夫禪がある。何の方面にも禪はある。であるから、耶蘇教は不可ない。回々教は好まぬ。佛敎哲學は嫌ひちやと云つたところで、悉く、禪といふ意味は其れらにあるのである。算盤珠を弾くところにも禪はある。肥桶を擔ぐところにも禪はある。大工が斧を振りあげるところにも禪はある。活花、茶道、擊劍、柔術にも悉く禪があるのである。能樂、淨瑠璃、長唄、常磐津、すべてに禪は存在せざるなしちや。

二 人は麴のみにて生きず

兎角、化学者が世界を見ると、化学者の總てのものが出て来る。文學者が見ると文學的に解釋をする。經濟家は經濟の理を説き、美術家は美術的に見る。然しながらそれ等は、一の感じから左様であつて、宇宙の本體からまで其通りであるとは云はれぬところがあるに相違ない。が、一箇の眞理を種々の方面から見ると、其の一箇の眞理の本體を失つて居ないのが多いのである。

これに就いて思ひ出したことがある。耶蘇教のバイブルの中に、たしか馬太傳の第四章だと思つて居る、こんなことが載つて居る。彼の耶蘇教は「ヨハネ」に就いて、「ヨルダン」の河に於て洗禮を受け、大野原に行つて坐禪をした。すると、いろ／＼の悪魔が出て来て、此の坐禪、即ち、靜慮を妨げて、彼れを試さうとしたのである。耶蘇は四十日間も斷食をしながら坐禪をして居つたが、惡魔が出て来て、野原にある石を取り、お前が果して神の子であるならば、さうまで飢ゑて居ないでも、此石を麩にして食つたら可からうと云つたのである。耶蘇は答へて曰く、「人は麩のみにて生くるも

のにあらず」と。此の耶蘇の答へは良い言葉であると思ふ。人間は、唯、腹一杯飯を食べたから其れで生存して居られるといふものではない。如何に美服を身に纏ひ、如何に立派な大厦高樓に住ひをして居つても、如何に美味に饜き巨萬の富みを有して居つても、如何に高位高官に在つたところで、此の點だけでは何等の價値が無い。人は麩のみで生きて居ると思つたら大間違ひである。必ずや堅固なる信仰心によつて生きてねばならぬ。人は神様の道に依つて生きて居るのである。たとひ、三十日四十日食はぬからとて、決して、死んだのではない。それから、なほも、惡魔は耶蘇を種々の處へ連れて行つて之れを試みた。高い處へ連れて行つて、此處から飛び下りて見よ、若しお前が神の子であるならば、神様が救つて下さるであらう、怪我はしないであらうと云つた。或ひは、また、己れの足を出して、此の足を禮拜せよ、そうしたならば、世界の榮華を極めさせてやらう、すべての事、皆、汝が意の如くならしめてやらうと言つた。然れども、如何に榮華は極めさせられても、如何に意の如くなるからと云つ

ても、悪魔の足を拜することは出来ない。「バイブル」に神とあるのは、佛典に佛とあるのと、名こそ異つて居るが、眞の神佛に決して變りは無ないのである。

釋迦が菩提樹下で悟りを開かれるまでも、また、種々の悪魔が現はれて妨げをした。悪鬼羅刹赤鬼青鬼が飛道具で迫害したこともある。美人が出て来て釋迦の心を蕩かさうとしたこともある。斯くの如き中に在つて、泰然自若、一切の悪魔を降伏してしまはれたのである。こゝに悪魔と云つても、實際に其様な恐ろしい者が居つたのではなくこれは内心の悪魔である。其の悪魔が佛の禪定力を亂さうとしたのである。耶蘇及び釋迦が此の悪魔と戦はれたのみでなく、現在、我々の心中では、常に、佛魔が互に激しく戦つて居るのである。善と惡と、正と邪と、終日終夜、大争闘をやつて居るのである。佛が勝つか魔が勝つかによつて吾人の價値は決まるのちや。マホメットの傳を見てもヒラ山中で坐禪をして居つたときにコーランの經文を授かつたと記してある。こんな具合で、何れの宗教でも、教祖になると、皆、靜慮坐禮をせなかつたも

のではないやうである。夫れで、老耆が思ふには、世間が開ければ開けるほど、忙しくなればなるほど、此の禪といふものは大切のものであらうと思ふ。

三 大休息の處に

極く平つたく解り易いやうにと、禪を解釋すると、些か消極的ではあるかも知れぬが、大きな仕事を爲さうと思へば、先づ、大きく休んで置かねばならぬと云つた道理と同じである。古人が「能く働き能く休む」と云つた語は大いに味ひのあることである。休むといつても酒や女にふけると云ふ意味ではない、必ずしも大なる事業とは限らぬ。何事でも爲さうと思へば、能く休まねばならぬ。西洋人などは確かに此事を實行して居る。六日間は一生懸命働くが、日曜になると、慾も得も打ち捨て、しまつて愉快に遊ぶ。或ひは教會へ行つて祈禱を捧げ、或ひは空氣の新鮮なる公園に出かけては、老幼男女、貴賤貧富の差別なく打ち交はつて心身を養ひ元氣を回復するのであ

る。そこで、一時間休んだ力で能く百時間の働きが出来ると云つた道理で、四方八方に向つて活動し得るのである。老衲が或時汽車に乗つて居ると、某人が、何日何時でも眠むいと思ふ時に眠れるやうになり度いものだと云つたのを聞いたことがある。確かに其れは然うである。何日何時でも眠るといふことは容易なことではない。金が出来れば出来るほど、田地が多くなればなるほど、神経が過敏になつて心配ばかり増して来る。終日、雑務に追ひまはされて安眠も出来ず、一生、苦しんで死んでしまふのである。而して、あとには一物の残るものがない。だから、大いに働く前に大いに休息するといふことが必要である。

以上は、極く卑近な例を取つたのであるが、更に精神界に立ち入つて、禪道の上から云つて見たならば、休息は必ずしも身心の疲勞を慰する爲めのみではない。吾人の心意は、常に、左轉右轉、妄動して安住するところを知らぬのである。幻のやうな妄境に囚はれて、彷徨惑亂して居るのである。其の彷徨惑亂して居る妄情妄念を休息せ

よと云ふのちや。休息では未だ力が弱い、キツバリと止めてしまふのちや。そこに永劫生死の業悔を躍倒し、無明常夜の暗窟を撥轉して、歡喜踊躍の裡に任運の活動が得られるのである。が、それだけではいけない。止めて止めざる處に安住せねばならぬ。大燈國師の歌に、「坐禪せば四條五條の橋の上、往來の人を深山木にして」とある。これが、心の大休息の處を云つたのである。即ち、こゝが止めたところちや。或人が、また、此歌を直して、「往來の人を其の儘にして」と咏つた。こゝが、止めて止めざる處である。これは少しコジつけのやうに聞こえるかも知れぬが、然し、斯う云はれぬこともあるまいと思ふのである。坐禪工夫の要は此處にあるのである。坐禪とさへ言へば、此の世の中を後にして静かな山の中へでも入らなければならぬと思ふのは大きな心得違ひである。人々が確乎不拔の信念を持して工夫辨道するならば、處は何處でも構はないのである。この大休息の意味さへ徹底的に了解が出来ればよいのちや。大勝知佛は十劫の間、道場で端坐工夫をされたが、それでも、成佛は出来なかつた。

悟れなかつた。これは形にばかり囚はれてはならぬといふことを誡めたものであらうが、諸君にして、若し、これ以上のことを合點したいとならば、直參の上で合點なさるがよい。以上は極めて卑近なところで解り易くと思つて未學の士の爲めに述べたに過ぎないのである。

精神的大燈明を點ぜよ

一 人間は我身の解らぬ者

人間は、兎角、自分の身の理解らぬものである。昔、或る處に一人の老婆があつて酷く世の中の澆季になつて來たのを憤慨し、「世間の者が皆な懶惰者になつて困る」と切りに小言を並べてゐたが、其の内に人間ばかりか鶏までが怠惰者になり出して來た

からとて、一層憤慨し始めた。其の言ふ事が面白い、「世の中が今日のやうに澆季にならぬ前は、鶏も却々眞摯で、朝早くから目を醒して晨を告げる事を決して怠らなかつたものだが、此節の鶏にそんな殊勝なのは一羽も見られぬ。東天が白んでも晨を告げやうともせず、欠伸ばかりして居る」と、然し、其實、鶏は依然として曉の來るを報じて怠らなかつたのちや。たゞ老婆が年齢の故で聾となり、鶏聲を耳にし得られなかつたので、欠伸をしてゐるとしか見えなかつたものである。

世の中には、此の老婆と同じく、聞けども聞えず見れども見えず、自分で自分の事さへ理解らぬ者が多くはなからうか。又これと反對に、盲でありながら能く見え、聾でありながら能く聞える人もある。これは耳で聴くのもなければ、眼で見るとも無い。心の耳で聴き心の眼で見るとも無い。視、聽、觸、味、臭の外に猶ほ人には見たり聴いたりする力があるものである。之れを西洋の學者では第六官とか云ふて居る者もあるが、此の不可思議力は五官でもなく五根でもなく、心で見聞する力で五官が統

一されて一つになつたものぢや。白隠禪師は隻手の聲を何と聞くとの問題を提げて參禪の徒に示されたものだが、之は五官に依て解決せらる可き問題ではない。隻手の聲は、心で聴き、心で解決すべき心の問題である。之を解決する心の不可思議なる作用を『觀』と稱してある。人は此の作用に依て、能く世間の真相を究め、無垢清淨の如何なるものなるやを了得り、廣大無邊の智慧にも達し得られるのである。此の眞觀、清淨觀、廣大智慧觀に達してしまへば、一念よく三千世界を透視し、無差別平等の眞相にあつて而も差別に應じ身を處するやうになる。

然し、眞觀も清淨觀も廣大智慧觀も、自覺自利のみに住まつて居るものではない。一たび眞正の自利觀に入り、三千世界の實相を觀じ、眞に清淨となり、眞に大智慧を獲得してしまへば、其の自覺自利は一轉して覺他に變じ利他觀に遷るのである。世間の人々が生老病死の苦に悩み、憎い可愛の妄想に附纏はれて、悶へ苦んで居る状態を觀ては、什麼かして夫等の人を救つてやりたいと云ふ氣になるものぢや。斯る心情

になつた時の利他觀は、之れを稱して悲觀または慈觀といふのである。自分が眞箇の道に達し得るやうになれば形相に囚はれて醒醒し、朝から晩まで妄情に追ひ廻はされて苦み悶へて居る人を視ては、到底これを其まゝにして放置つて看過し得られるものではない。什麼しても悉く之れを救ひ出してやらねばならぬといふ慈悲の心が發起するに至るものぢや。

二 畜生にも見る可き點あり

人は犬猫を畜生と云つて馬鹿にして居るが、其の畜生が却つて人間に優したところがあると思はれる點が無いでもない。犬畜生でも如何に己れが飢えて居たからとて、他の物を奪ひ取つてまで己れの腹を充たさうといふ下劣な行爲は致さぬ。人間にあつては殺人強盜詐欺脅喝等いろ／＼の恐るべき行爲がある。犬畜生にそんな無法をする行爲は見られない。殊に昨今の如き戦争にでもなると、人間が人間を屠り其血を流し

て平然たるばかりでなく、戦争には又必らず強盜強姦が附屬物のやうになつて居る。老衲が日露戦役に従軍したのは、まだ戦争の初期であつたが、南山の戦が終り夕陽の傾く間に其處此處と錫を牽き、戦死者の供養などして巡ると、直ぐに手當をすれば十分生命は助かると思ふ兵士でも、此の慘憺たる戦場にあつては手も及びかねる事だ。出血のまゝ、戦野に棄てられ、恨を呑んで落命せねばならぬ運命にあるものを見たり、又進軍すべき場合には、累々たる死屍の丘、懐じき戦友を踏みつけて行かねばならぬ狀況を實驗して、戦争の悲惨、實に之れに過ぐるもの無きを見る中にも、戦死せる兵士のうちには、軍服の胸の釦が外づされて居るのが、存外多いのを見て、老衲は實に奇異の感じがした。人間は平素は随分我儘なもので、虚偽、偽善を以て自分の身體を飾り、自分の本心を欺いて居られもするが、一たび死に面すれば、偽り飾る心も捨て、本來の善心に立ち歸り、赤裸々の眞人間になるものぢや。一度砲煙彈雨の間を経て來た人に、眞面目なところの多いのは之が爲めである。然し、斯程嚴かなる死を前

に控へた戦場に於てすら、戦死者の懷を探つて其の所持金を奪ひ取るやうな行爲をする、斯んな事は犬猫に見る事の出來ぬところである。萬物の靈長なりと自ら誇稱する人間にして、かくも淺猿しき行爲がある。情けないことぢや。また親子夫婦兄弟の間でありながら、可愛さ餘つて憎さ百倍とでも謂はうか、親を相手取つたり、良人を相手取つたり、兄を相手取つたりして、之を裁判所へ訴へ出るものがある。殊に、近年は、權利思想が發達して來たので、裁判沙汰が流行し、法廷に於て骨肉夫婦相争ふが如き、見苦しい行爲が演ぜられるが、これ等の事から稽へて見ても、人間は猶ほ犬畜生以下のものだと思へぬでもない。

然し、斯く、人間が犬畜生にも劣る淺ましい物になり下つてしまふのは何故か、自分の身體は清いもの、其の清い中に又無垢清淨の光明燈あることを知らぬからぢや此の無垢清淨光は、我が行くべき道を照らす燈明である。これに手頼つてさへ世渡りをすれば、能く諸々の闇黒を破り、諸々の災禍風火を伏し、結構、世の中を幸福に生

活してゆけるものぢや。

三 闇は箒で掃き出されぬ

『大智度論』と申す經文に、面白い一つの比喻が載せられてある。それは、或る洞窟から闇黒を箒き出してしまはうとした痴愚者に就ての事ぢや。その痴愚者、什麼思ふてか、或る洞窟の中から闇黒を箒き出してやらうとの心願を起し、朝から晩まで毎日々々、大きな箒を動かして、闇黒を箒き出す事に奮勉努力して試たが、幾日経つても効果が寸毫も現はれず、依然として洞窟の中は闇黒く、闇黒を些かたりとも外部へ箒き出し得なかつたのである。然しかく如何に骨折つても、闇黒を箒き出し得られず大いに當惑して居る處へ、一本の松火を點して突然洞窟の中へ來たものがある。すると忽ちの間に、洞窟の中は明るくなつて、別に闇黒を箒で掃き出したといふでも無いのに、いま迄闇黒が何處かへ姿を隠くしてしまつたのぢや——これが「大智度論」に載

せられた比喻の梗概であるが、人も又その如く、如何に煩惱を断ち切つて脱しやうとしても、煩惱の犬は逐へども去らずで、煩惱を全く断ち去つてしまふわけにゆくもので無い。恰度、洞窟の中から闇黒を箒き出すとするのも同じで、却々容易な事でも目的を達し得られ無いのぢや。そんな廻り遠い勞して功の無い業に骨折るよりも、生きとし生ける人間が、誰でも皆な其心のうちに持つて居る無垢清淨の光に燈油を差して之を精神的の大きな燈明ともし、又た松火ともし、これによつて自分の心の闇黒を照らす事にするが何よりの捷徑ぢや。然らば、求めざるも煩惱の雲は忽ちにして霽れてしまふのである。かく自分の心の闇黒が霽れてしまへば、人は更に他人の苦をも濟ひ、之に怡樂を與へやうとの慈悲の情を催すに至るものだが、斯く自ら慈悲を體して即身即佛なることを得ば、自づと戒を持して實踐道德の上に於ても、世間の非難を受くる如き弱點の無い、實に氣高い人間になれるものぢや。威あつて猛からず、優かな慈悲忍辱の間に凜乎として雷の如く、冒す能はざる徳性を涵養するのが肝要である。

趙州和尚の機鋒

一 念じ來つて寂々親し

今回は趙州石橋の話に附いて少し述べて見やう。僧、趙州に問ふ、「久しく趙州の石橋と響く、到り來れば只略行を見る」と、趙州の石橋は支那では有名なもので、天台山と南嶽の石橋と並び稱して、三石橋と云はれる程の名所であるさうな。趙州從諗禪師の住して居られた觀音院は、趙州城の東にあたり、石橋を距ること十里とある。然し橋に要事は無い。今は暫く觀音院に近い石橋を引いて來て商量するのである。總べて禪宗の商量は道でも橋でも石ころでも草一本でも、其の場に在るものを捕へて來て宗旨を全提するのである。是れは禪宗の特色であつて、必ず神とか佛とかを借りて來なければならぬと云ふことはない時に應じ機に従つて、手に委せて其場の物を

應用し來つて宗旨とするのである。故に故人も「念じ來つて寂々親し」と云つて居る。遠くに求めずに斯くも其場々の事物に即して親しく拈じて行くところに禪宗の面白味がある。

二 雲は青天に在り水は瓶に在り

李翱と薬山との商量も之れである。李翱は唐の元和の初に國子博士史館修撰となつた程の大學者である。流石に李翱程の大學者であつたけれども、禪宗の事は一向解らなかつたので、或時薬山のところへ行つた。丁度薬山は經を讀んで居たと見えて口をモグ／＼として居た。李翱も薬山は傑い禪僧であると云ふことは常々聞いて居たが逢つて顔を見ると何だか怪しき芋堀坊主らしい。斯んな坊主から法を聴いてもつまらぬと思ひ、それで袖振り拂つて出やうとした。すると薬山が、チョツと振返つて、「汝、何ぞ耳を尊んで身を卑しむ。」

と云つた。現代の評論家と云はれる人は、兎もすれば其の人の評判だけを聴いて人物月旦をやる。故に多くは間違つて居るのである。やはり心と心を照して人格を見るやうにしなければならぬ。評判だけを聴いて、本人を十分に知りもせずして、人物評論などをするは、其の人を誤つて天下に傳へるのであるから大なる罪惡である。現今の思想家の多くは耳ばかりを貴んで目の方を輕んずる傾向がある。サテ學者の李翺はチヨツと馬鹿でないから、再び座に歸り禮を施し、

「如何なるか佛教嫡々の道理。」

と問ふた。すると藥山は手を以て上下を指して、

「會すや。」

と云つた。さすがの大學者も是れが解らなかつたらしい。李翺云はく、

「會せず。」

所謂促へられて居るから解りやうが無いのである。そこで藥山が間に髪を入れず、

「雲は青天に在り水は瓶に在り。」

と云つた。實に雲は青天にあり、水は瓶の中にある。然し速合點して禪宗は其の身其の儘と思ふとあてが違つて仕舞ふ。此處は自分の工夫に訴へなければならぬ。李翺は言下に大悟し偈を述べて曰く、

鍊得身形似鶴形

千株松下兩函經。

我來問道無餘說

雲在青霄水在瓶。

三 如何なるか是れ石橋

さて今是の僧が事に借りて宗旨を問ふのである。是れ借事問である。所謂、趙州の力如何んと試みんとする希望を包んで居る問ひである。

「趙州の石橋と云ふと、誰れ知らぬものも無い程有名なものであるが、聞いたと見たとは大の相違、來て見ると何のこともだ、丸木橋ぢやワイ。」

と云ふ。趙州の從諗禪師と云へば實に偉らさうであるが、來て見ると皺だらけの坊主だと云ふ意味を石橋に貸りて云つたものである。然し趙州の手並は、徳山の如く棒を振廻はしたり、臨濟の如く喝をも行はぬ。一言半句に與奪自在の働きがある。趙州の答へに、

「汝只だ略 狗を見て且く石橋を見ず。」

おぬしの眼には丸木橋より外に見えぬな、眞實の石橋は見えまいと云ふ。大人物に逢つても自分の根柢相應の大きさより大きく見えぬ、實に此の答は面白い。誠にアツサリした答ではあるが、中には不可言の深い意味を含んで居る。是れを禪宗では探竿、さぐり竿と云ふ。然るに此の僧果して趙州の釣針に罹つて來た。僧問ふ。

「如何なるか是れ石橋。」

そんなら眞の石橋は如何んなものかと云ふ。それに對する趙州の答へは實に樂な、自由な、解脱した答へである。

「驢を渡し馬を渡す。」

うさぎ馬も渡せば荷馬も渡す、又おぬしの如きチンバ馬でも渡す。文字だけで云へば斯うであるが、原の本意をスツカリ自分のものにするには困難である。禪も此處まで磨りあげると實に禪らしき臭みがない。些かの圭角も無いのである。

四 如何なるか是れ大善知識

趙州が或る時庭を掃いて居ると、或る僧が突然やつて來て、

「如何なるか是れ大善知識。」

と問うた。大善知識であつたならば、心中に塵一本も留めない道理である。然るを和尚は何故に掃除なごをして居るのであるかと云ふ。すると趙州は即座に、

「外來底。」

と答へた。「そこらあたりに塵が立つた」と云ふのである。是れは頓智ではない。ま

叩けよ開かれん

三〇

た僧が、

「清淨の伽藍什麼として塵有る。」

と問うた。そこで趙州が、

「又一點あり。」

そこらに塵が立つたと思つたら、又一つ飛んで來たと答へて居る。或る僧がまた趙州に、

「如何なるか是れ道。」

と問うた。趙州答へて曰く、

「牆外底。」

牆の外を見よ、おぬし其處を通つて來たらう。あれが即ち道ぢやと云ふ程の意である。僧曰く、

「這箇の道を問はず。」

イヤ私はそんな道を尋ねて居るのではない、大道を尋ねて居るのであると云ふ。趙州曰く、

「大道長安に透る。」

そうか、大道は長安に透つて居るよと云ふ、實にスラリとした答へぶりである。長安は當時に於ける支那の都である。道は長安の都まで正しく通じて居るぢやないかと云ふのである。それを日本について云へば東海道とも云へやう。東海道は東京まで眞直に通つて居るから、サツサと通つて行け、すると東京へ行かれるぞと云ふのである。それ程安全な心安い道がまたと外にはあるまい。

五 灌溪と趙州との機鋒

達磨大師が二祖を攝した時に於ける、黄檗が臨濟を攝するにも、其の手段は實に孤危險峻であつた。實に傍にも寄り附かれぬ程手キビシかつた。然し是れは殊更に宗旨

趙州和尚の機鋒

三一

を惜しむのではない。修業者に自發的に十分に力を現はさせるには是れでなければならぬ。學人の手を引つ張つたり、頭を撫でたりするやうではいけない。すべて人は反抗心によつてドクドクと進んで行くものである。初めから柔しくして頭を撫でたりすれば、馴れて仕舞つて進まなくなるのである。突き落とし、突き落し、叩いて叩いて叩き附けると、學人は益々奮激して油断なく修行する。奮激し奮激し、自ら鞭打ち、師家の手を借らずに力を現して来るやうになる。師家は是れを待つてゐるのである。

すべて公案を透つた、氣が附いたと云ふ。なるほどその人だけには得たかも知れぬが、實際の大人物と云ふには、大手段を以てしなければならぬ。老婆が孫を可愛いがるやうな攝取振りでは、大人物は到底作ることが出来ぬ。

斯くの如くではあるが趙州には少しも孤危の風が見えぬ。然し趙州は棒喝の如くいたゞしき手段は用ひぬけれども、そこにまた道まさに近しと云はれる處がある。口を衝いて出づるは痛棒より痛く、熱喝よりも熱して居るのである。故に雪竇は是れを

評して「海に入つては還つて須く巨鼈を釣るべし、笑に堪へたり同時の灌溪老」と賞讃して居る。大海に飛び呼んでは海老や雑魚が相手ではない。巨鼈と云つて大なる國を背中に載せて居る程の大鼈が相手である。鼈も目高も餘さず救ひ取らんとするのが、阿彌陀佛の本願である。故に賢いものより馬鹿が大事であると云ふ。禪宗は是れと正反對であつて優れたものを先づ相手にしやうとするのである。斯くの如く佛教は廣般で、いろ／＼な方面が開かれて居る。趙州になると目高や海老が相手ではない。灌溪は臨濟下の人である。或る時僧あり問うて曰く、

「久しく灌溪と云ふ溪川に流れ、所謂灌溪和尚はもつと偉い人であると思つて居たのに、来て見ると小さな流れ、所謂つまらぬ凡僧に過ぎぬではないか」と云ふ問ひである。すると灌溪和尚云はく、「おぬしはさう云ふが、おぬしは小池ばかりを見て灌溪の本領を知らぬ」と云ふ。それで僧が「如何なるか是れ灌溪」と問うて來た。すると灌溪和尚は「劈箭急なり」と云つてゐる。即ち此の灌溪の激流は強弓で射る弓よりも早い

ぞと云ふのである。この急流の中に這入ると生死迷悟すべてを押し流す。この答もすぐれては居るけれども、趙州の如くスラ／＼と答へては居ない。趙州になると實にチヨツとも悟りらしきところが出て居ない。所謂灌溪の答も悪いではないが幾分か堅くなつたやうな痕が見える。すべて堅まつてはいけぬ。藝人なども高座へ上つて固くなる内は駄目で、聴衆に吞まれるやうなことなく、スル／＼と出て来るやうになつて初めて聴衆を吞むことが出来ること云ふことである。實に趙州の如きは呼ばば應ずる山彦の聲の如く、些の圭角もない、實に趙州の答は圓熟して居る。此の點に於て趙州は全く古への多くの禪者中に於て卓然たるものがあると思ふのである。

眞風度籥

一 變らぬ物と變る者

我が佛教の教理就中禪宗の立場から言ふと、凡そ物には體といふものがあり。同時に用といふものがある。委しく言へば起信論などで體相用の三大といふ言葉がある、今體相用三大のことを言うて居る暇がないが、約めて言へば、體と用では大は天地より小は一微塵に至る迄、何物を捕へて見ても皆體と用と相備はらぬ所のものは一もない。此の體と用とのことを一言すると、いつも變らぬ所のものが體であらうと思ふ同時に用といふ働きになると、いつも變る、其變化の迅速なるは恰も電の光るが如く、風の走るが如く、火の燃えるが如くに、時々刻々に始終動きつゝある。變りつゝある所のもので、其變らぬ物と變る物と其形から眺めると、如何にも極端である様でありませぬけれども、其常に變らぬ所の物を慥かに認めて居る所の人であつたならば、常に移り變はる世の中に立つて縦横自在に働き、所謂聖人は物に凝滞せずして、能く世に推移るといふことになるであらうと思ふ。此趣は古人の詩に青山元不動、白雲自去來といふ句がある。これは文字は讀んで其通りであります。例へば富士でも宜

しうございませう。富士の山は一寸も動かぬが、白雲は常に自ら去り自ら来る。漢詩の言葉で言へばさういふ有様で、日本の言葉では山岡鐵舟居士の歌と思つて居りますが、「晴れて善し曇りても善し富士の山元の姿は變らざりけり」これも道歌染みた歌でありますけれども、趣意に於ては皆な同じことである。我が佛教の教理の歸する所も禪の禪たる本領も、みなそこにある。第一に相變らぬものを一つ得ようといふのが、これが吾宗旨の着眼點である。變らざる所のものを親しく手に入れた以上は、事物に凝滞せずして變るものと同化して行くことが出来る。要するに禪門に於て公案を與へて工夫せしむるとか静坐の方法を以て修行せしむるといふのも、其實は、體といふ變らぬ所のものを第一に得せしめよう、昔のく大昔から末の末迄一以て貫いて變らぬ所のものに徹底せしめやうといふのでありますが、扱てそれはどういふものであらうか、それ以上はお互ひに實地の工夫修行を要するのであります。

二 體と用とは形と影の如し

孫子の言葉に、「其疾きことは風の如く其徐かなることは林の如く侵掠することは火の如く動かざることは山の如し」といふ言葉がある。これは孫子でありますから兵法に附て言つたことかも知れぬけれども、我々が探つて以て用ふれば、敢て兵法とせぬでも日常行事の上に於て此の言葉を應用することが出来ると思ふ。今言ふ徐かなることと林の如くと言ひ、それから終の言葉に動かざること山の如くといふ。これが謂ゆる物の體を得た所であらうと思ふ。其體を親しく得て見れば、自ら働きはそれから現はれてくるのだ。斯の如くしよう。豫め待ち設けぬでも、其疾きことは風の如く、侵掠することは火の如くといふ。斯ういふ働きは自ら出来てくるのであらうと思ふ。例へば平時と戦時である。平時に於て戦時を忘れず、戦時に於て平時を忘れず、即ち事無き時に於て、事有る時の準備をし、事有る時に泰然自若たる所の其態度がなくてはな

らぬと思ふのであります。これは昔からも言ふ通り治に居て亂を忘れずとか、又文事ある者は必ず武備ありといふ様に不斷の準備と云ふことを忘れてはならぬ。畢竟するに體を得て自ら用に現はれてくるので、其用たるや又體よりして現はれて出てくるのである。體と用と殆ど形と影の如く常に相離れることは出来ぬと思ふ。

三 平和の政策と準備

して見ると、色々雑駁なことになると思いますが、それから考へ及ぼして見ると、必ず人に於ても人の體たる特色といふものがある。國に於ても必ず國の體たる特色といふものがある。何物にも必ず名物といふやうなものが必ず一つ宛あるに違ひないが、我國の名物といふやうなものは何であらうか、又佛教各宗が斯の如く開けてあるが、其開けた中に附て禪といふもの、名物は何であらうかといふ様に、世間に涉り出世間に及ぼして考へて見ると、これは餘程考ふ可き所の餘地があらうと思ふ。今日斯ういふこ

とを言ふのは、あなたの方が寧ろ委しくあつて老翁は此點に於ては、門外漢かも知れませぬが、近頃色々な書物を読んで見ると斯ういふ言葉が外國に行はれて居る、殊に亞米利加の流行語になつて居るといふことである。(Safety Policy) それと同時に (Preparedness) と云ふのである。(Safety Policy) のいはは譯して平和の政策といふことでありませう。それと同時に一面には (Preparedness) 即ち準備といふことが必要である。これは昔から言うたことでありませうが、殊に時局に附て一つの流行語の如くなつて居る様である。成程さうでありませう、世界人類の理想として居るものは平和である。併し乍ら平和だと言つて、只漫に太平を謳歌して居る譯ではないのである。平和を理想として居ると同時に一面に準備といふことを朝から晩まで怠らないことが必要である。

四 歐米の國民性

聯合軍と獨逸側の此度の戦に附てもさうであらうと思ふ。老衲が知た所を以て見ても獨逸といふ國は少くとも今から五十年餘り前に普佛戦争をやつてから以來、常に其準備を怠らず質素勤儉を守つて居つた。それと同時に總ての事が學術的で、只科學といふものを學理上で講釋する許りでなく、有ゆる科學を八方に應用して居るといふ様な跡が今日に歴々として見えるのである。鐵道に附て見れば鐵道を平時の交通運輸に用ふると同時に戦時には直に斯く用ひるといふ様に出來て居る。又工場に附て見れば其工場は平時の生産は云ふまでもなく戦時には斯の如く活用するといふ様に出來上つて居る。何事にも平時に於て戦時の事を豫想して有ゆる科學を研究した結果を今日の戦争のあらゆる方面に適用して居るのである。斯ういふ様な有様で勿論準備といふことは武備に限りませぬが、獨逸と云ふ國は今日から見ると有ゆる方面に準備を忘れなかつた。恰も今日の事を豫じめ知つて居つたかの様に準備されて居た。今日迄の成績を以て見ると、ブレベアアドネスといふことの如何に効果が現はれて居るかといふこ

とが判つた。殊に斯ういふ言葉が、亞米利加邊に最も流行つて居るといふことが或る書物に書いてあつた。成程さうでありませう、亞米利加人の理想といふものは主もに平和にあるであらう、けれども準備といふことを少しも忘れては居らぬ。であるから茲に新しい一つの發明があり、一つの發見があるならば、今日迄珍重して居つた所の何物でも恰も草履を脱するが如くに捨て仕舞つて其新しい物を採用するといふ勢で一つの準備を終へたならば更に他の準備に取掛るといふ様な有様である。亞米利加許りでない。今の獨逸が何故に斯の如く進歩したかと言へば、老衲に言はせると一面には質素なる生活に安んじ、さうして一面には、常に準備的努力を怠らなかつたといふことである。又英國の如きもこれも或書物で見たのですが、英國人の氣質を一言に言うて見るとジョンブル(牡牛)的であるそんな様な國民だ。昔の發句に斯ういふことがあるのを思ひ出した。「遅くとも春は來にけり牛の年」其牛の様な性質を持つて居るのが英吉利人である。であるから英吉利人の今日を致したる所以といふものは、言はゞ石橋

を叩いて而して後に渡るといふ様な堅實なる國民の氣質を以て、さうして其力を有ゆる方面に、耐久的に極く眞面目に而して其國民性を鍛ひ上げたのが、今日の英國の有様である。併し乍ら牛の如き其様な性質は最も尊む可き性質であるけれども、同時に或點に於て今日の準備を忘れて居りはせんか、ごんなものであらうか、一寸斷言は出来ぬ。今度の戦争で、今日迄の聯合軍側と獨逸軍側と對照して今日の有様を見ると、一方は其準備を忘れて居らなかつたであらうか、少くも一方の踐出し方が遅れて居らなかつたであらうかと思ふ。成程將來は聯合軍が勝を制するであらう。我々もそれを希望する。

五 對岸の火災視する勿れ

却説吾が日本は、交戰國の仲間入りをして居るに拘らず、鐵砲玉の音も聞かず、慘憺たる死傷者をも見て居らぬので輸出の超過が四億とか、六億とかになつたと言つて

有頂天の如く驚喜し他の歐羅巴の將來は對岸の火災で、只一時を謳歌して居る様な有様であると言ふ迄もなく、地理に於て少し遠ざかつて居るだけで、今日交戰状態の渦中に吾々も居るのであるから、斯ういふ一時の僥倖に安んぜずして、現在戦争中の準備、否戦後の準備といふを忘れてはならぬ。勿論其準備に附てそれ／＼専門家は研究して居りませう、殊に諸君は此點に附て一層心を潜めて考へて居られませうが、概して言ふ時には、或る知識階級を除いて多數の人々は、殆ど歐羅巴の戦争は丸で岸を隔つた火事の如く思つて居るのではなからうか、老衲共は一億とか二億とかいふ金銭を見たこともないが、併し三億四億を此の戦争で輸出上から得たと言つて喜ぶといふことはどうであらうか。亞米利加の如きは、殆ど今日迄に六十億の輸出超過を得て居るといふ有様である。斯ういふ様なことを言ふと、門外漢が言ふので頗る怪しく聞えるでありませんが、先づ以て斯ういふ現時の状態である。所が兎も角も英國は英國でモツと牡牛の様な性質をこれから何處迄も現はすであらう。亞米利加は血氣旺盛の青年の

如くこれから更に戰時的にも、平時的にも、恰も春陽に向つて野草の萌々として燃え出る様な有様で進むであらう。獨逸は勤儉な質素な生活を保ち何處迄もあらゆる學術を實地に應用して益々發展するであらう。而して我國の名物は何であらうかといふ事になると、どんなものでありませう。少くも彼等に凌駕する程の名物が我國にあるであらうかといふと、言ふ迄もない、我國の名物は忠君愛國だ。成る程獨逸にも愛國の精神がある、英國にも愛國の精神がある。總ての國皆然り、只其忠君といふ點に至つては、どんなものであらうか。勿論其國の國體と言ひ歴史と言ひ、風俗習慣が總て違つて居るが、絶對的に彼の各國を凌駕する程の名物といふものは何であらうかといふと、どうしても忠君といふことを言はねばなるまいと思ふ。

六 忠君の一大精神

申すまでもなく我國は君主あつて後人民ありといふ歴史を持つて居るのであるから

斯くあるのが當然である。然るに人民があつて國があり、國があつてそれから君主の用を生じたといふのが、泰西の國の成立であるが、獨り我が日本は皇室があつて而して我々國民といふものが自ら起つて來たのである。其れ故に此忠君の一大精神は寶祚と同じく天壤無窮であらねばならぬ筈である。然るに彼の國に於ては君臣といふ關係は一言にして言へば勢力爭奪の關係で、一種の權力を得た者が君主となり、さうして他の者は之が臣民となつて仕舞つた。さういふ様な有様であるから今日の君主は他日の臣民となるかも知れず、今日の臣民は明日の君主となるかも知らぬのである。之に反して我國は今日迄の歴史の成立つて來た事實から言ふならば、それは斷じて出來ないことである。斯ういふ鹽梅に考へて見ると、英國の牡牛の如くに、着實な固い、遅くとも他日大なる効を奏するといふ、獨逸の如く最も勤儉な合理なる精神、亞米利加の如く日々新に又日に新に進んで行くといふ精神、是等皆な各々の特長で頗る嘉す可き尊む可き精神であるが、更に其精神を凌駕する様なものが、日本に何かあるか

と言へば、老衲は忠君といふことを繰り返さねばならぬ。所が扱て事實に附て考へて見たらざうでありませう、此の我々同胞の中にも或者は我が歴史、我國體を知らずして却つて先づ彼の國の風俗習慣に心酔し、一も西洋二も外國と外國人の口を通さぬことは、善美でないが如く、彼れの手を通らぬことは文明でない様に思つて居る輩があるそれは寧ろ物質界よりも精神界に其傾きが多くある様に思はるゝ。例へば自然主義とか本能主義とか、瞬間主義とか、現實主義とか、色々主義があるが、要するに疎慢なる個人主義に外ならぬ。所謂個人主義といふものは元より立派な主義の一つである。それが誤られて本能主義になり享樂主義になると、只一時の快樂を恣まゝにしたいと云ふ様な淺薄なキハドイものに成り下つたのである。誤られた説の害毒なるものは、老衲杯の口を通して言ふ迄も無い、あちらにもこちらにも滔々として流れて居る。成程我國の名物の一つなる武士氣質といふものは今日も尚活き／＼として居るが、併し昔の武士氣質とを比較したらざうか、今日の日本は言ふ迄もなく世界的に國運が進ん

で居る。然れば其武士道の精神も更に世界的でなければならぬと思ふ。

七 國民道徳を如何せん

然るに我が同胞の中に狹隘なる御國自慢の島國根性を以て武士道の精神なりと曲解して眼孔豆の如く小さく欲望は鮒の如く淺慕なもののがなからうか。例へば一つの物品を製作しても、只目前の利益を目掛け、永遠の信用を顧みないと云ふ有様であるから眞の武士道は甚だ尊ぶべきであるが、同時に商業道の道徳は如何、農業上の道徳は如何と見れば太だ心もどなき有様である。一言に言ふと、實業道徳は武士道の進んだ如く立派に進んで居るかといふに中々以て進んで居らぬ。これは今日大に考ふ可きことゝ思ふのであります。今日は、道徳と言へば、教育家或は宗教家の掌る者の如くに思ひ爲されて仕舞つて、今日經濟上に立ち、又は政治上に立つて居る者は何事を爲しても構はぬかの如く思つて居る。それが色々な方面の事實に現はれて居ると思ふ。こ

れを色々な方面から研究し色々な方面からこれを矯め直して行かなければならぬと思ひますが、老耄の立場から見れば、眞面目なる宗教的信仰が國民一般の精神に流れて居らぬ。其原因が大なるものと思ふ。假令人は見て居らぬでもといふ考が起らぬのは、これは單なる道德、單なる約束では出来ぬ、其れ丈では必要が起ると、其道德約束を破つて仕舞う。モウ一つ宗教的に神に誓ひ佛に對して自ら欺かぬと云ふ精神が有ゆる階級の人の頭になければならぬ。所が往々にして我々は學校の教師でないから迂腐なる道德といふ様なことは知らない。宗教家でないから信仰などといふ様な娑婆氣の無い事は要らぬなど、公然と云うて憚らぬ様な者が少くない。斯ういふ様なことで國民道德といふ點に於て、大に世界に對して面目がないのであらう。

八 自問自答せよ

モウ一步進んで宗教的眞面目な國民の精神、統一された所の國民の精神といふもの

は何れの處にあるかと斯ういふ工合に尋ねられたならば、殆ど即答する事が出来ぬではなからうか。要するにこれを宗教の上に持つて來てもさうである。天台には一心三觀といふ名物があり、眞言には阿字本不生といふ名物があり、日蓮宗ならば皆歸妙法といふ名物があり、淨土宗並に淨土眞宗には攝取不捨といふ名物がある。果して然らば禪は何であるか、私が斯ういふものなどいふことを言ふよりは、それは諸君が鍛錬工夫して御座る通り人々自身に向つてお考へになつた方が明かである。老耄は今茲でこれだといふ事は言はずに残して置く、言ひたいけれども残して置く、禪は何であるかといふならば、先づ我れは何であるかと自問自答的に追窮して行くが宜しい。今まで申して來ました武士道の精神も大和魂も忠君の精神も只これを空文的に考へた丈では駄目である。果して是を親しく吾物にして不言實行に入るのが禪の始めでありませう。只當ニ自怡悦、不堪ニ持貽君珍重。

(大正六年十一月夜於銀座集會所)

極所に一線道を求めよ

一 徒らに新を説く勿れ

近頃は、兎角、新しい文字、新しい言葉が流行する。例せば「新日本の新天地」などが其れである。「新」といふことは、一面に於て善い思想であるかも知れないが、使ひ所によつては甚だ面白くない。我が日本は、二千五百有餘年の昔から既に立派な國士として存立して居つて、今ま新たに日本を形成したのではないから、新日本とは言へないのぢや。我國は神ながらの尊い國である。人民も神ながらの人民である。新たに他から渡來したものではない。のみならず、其の思想も神ながらの思想であつて、他國の輸入思想ではない。此の見地からして、老滄は「新日本の新天地」などいふ言葉は餘り面白くないと思ふ。

併し乍ら、國運は日を追うて隆々と、事々物々が、年と共に新たなる喜びの色を呈してゐるかの如く思はれるのは、實に目出度い極みである。けれども、歐洲の天地は暗雲漠々として平和の曙光を認め難く、東洋の天地も亦た少しく動搖しかけて來た時に當り、我國民が獨り關せず焉たる顔をして居るのは間拔けた話である。故に、國民としての大自覺を、一層、痛切に感じ、上 陛下に對し奉公の誠忠を捧げ、下萬民と共に其の萬全を計らんと、爰に大いに振ひ立たねばならぬ譯であらうと思ふのぢや。それには、決して、新を追ふの必要はない。我れの國是は二千五百有餘年前に既に定められてあるから、此の國是によつて歩調を一にし、惑はず迷はず、活潑々地の活動させなければならぬ。

二 いはゆる絶對に到れ

元來我が禪門の立場からいへば、新とか舊とかと云ふ相對的思想は取り除けなければ

極處に一線道を求めよ

ばならぬ。それを取り除けて所謂絶對に到らねば、眞の活潑々地の働きが能きぬものぢや。兵士が戰場に出て、敵と相對したるの折、我が國家の爲め敵を斃すのであるとか、何とか考へてゐる間は、到底向ふに彈丸は甘く命中するものではない。理論は平時の時に考へて居るものであつて、いざ命のやりとりをする時に、國も家も自分もあつたものでない。唯單に我身を棄て、何等思ふ所なく謂はゞ無中で戦争するから勝つるのである。即ち絶對であるから勝利を得るのである。單に戦争のみではない。危い船に乗つて漁をする漁士でも、田を耕作する百姓でも、算盤を持つて商ひする人でも、漁る爲に漁をする、田の爲め田を耕作する、商ひの爲に商ひをするでなければ眞に其事業が完全に行かない。

神佛を信仰する人でもさうである。此神様は何んな利益を與へて呉れるだらうか、彼の佛様は何んな功德があるだらうかと詮策してゐるうちは、利益も功德も自分にあるものではないのぢや。佛なり神なりに對つて、自分の信心の誠を込めて一心に信仰すれば、そこに始めて信心の功德が現はれるものぢや。

三 物に轉ぜられるな

然るに現今社會の人を見るに、此の絶對の力を以て自分が自分を活潑々地に轉じて行かうとはせずに、多くは人に轉せられてゐる。殊に今の青年に至つて此思想が著じるしくなつて來たやうである。學問をすれば學問に轉せられ、事業を劃すれば事業に轉せられ、家にあつては家に轉せられ、社會に出で、は社會に轉せられ、誠に自己の見地のごつしりした所は更にないやうぢや。我禪門に入つて禪を學べば、又禪に轉せられて、何等自己の働きと云ふものが見えない。外國に洋行すれば、外國の事物に轉せられ、我國のものは何でもつまらぬやうな氣になつて、あれも舶來、これも舶來がいつなご、云ふやうになるから此等の惡傾向を大に排除して行かぬと、幸徳傳治郎が外國の共和主義や社會主義を研究して、遂にその其傾向に轉せられて、身の毛もよだ

つ悪逆を企て、其身も終ひに滅びるやうになるのである。であるから虎頭に乗つて虎尾を収むるの力量を養ふがよろしい。

四 極處に至つて一線道を發見せよ

或る盗人の子分に一人の小盗人が居た。或時其小盗人が親分に向つて、盗みの秘傳を教へて呉れと頼んだ。所が親分の云ふには、「盗人に秘傳はありはしない。けれども秘傳はあるにはあるが、それは自ら知るものであつて、他から教へられて得られるものでない」と云つて居た。或る晩その小盗人を連れて或る大家に盗みに這入つた。處が何と思つてか親分が、その盗人を捕へて、大きな米櫃の中へ入れて上から蓋を固くして一人出て行つてしまつた。そして幾時待つても開けて呉れる容子もないので、小盗人は考へた。「慙うしていつ迄も居れば夜が明けて捕つてしまふは必定である。今のうちに何うにか工夫をせねばならぬ」と。命にかゝはる一大事であるから、それこ

そ一生懸命に工夫した。工夫に工夫を重ねた揚句、鼠の眞似をして米櫃の中で「チユー、コトン／＼」とやつた。すると折柄眼を覺してゐたその家のおさんが、「寢る時米櫃の蓋を十分にしなかつたと思へて鼠が這入つたらしい。明日の朝になつて主人に見付かると叱言を言はれる」と思ひ、起きて行つて米櫃の蓋を改めたが、何とも變つた様子が無い。けれども中に鼠が正しく居る様であるから、蓋を採つて見ると、イキナリ人が飛び出た。おさんが驚いてキヤツと氣絶をする間に小盗人はそこを逃げてしまつた。其物音に家の者が起きて見たが後の祭りであつたと云ふ話がある。物極まつて一線道を得ると云ふはこのことである。極處は言へない。即ち絶對である。絶對に入つて初めて此一線道の働きが起きて來るものである。

五 自己の心田を開發せよ

禪は他に向つて何等求むるものでなく、自己に對つて自己を求め、自己の心地に秘

める光明を發見して行くのを、修行とするのであるから、他に轉せられることなく
 ぞつしりと膽玉を落付けて、如何なる邪魔に出つくはしても、どこまでもやるがよい
 途中でぶら／＼した位で禪はわかるものでない。然るに今の禪客と云ふ輩は、多く此
 の途中にぶら／＼して終つてしまふ。これでは何にもならない。それでは禪の極處も
 活きも出来るものぢやない。況て國家に出で、有爲の人物たらんとせば、大に自己を
 磨き上げねばならない。自己を磨くことは禪を修行するに若くはない。而して神なが
 らの我國家を益々泰山の如く安からしむることに力を盡さねばならぬこと、思ふのち
 や。

力 用

一 力は即ち用也

此の力用といふ文字は、世間で餘り使用されない言辭であるが、老衲は今、白隠禪師
 の高足東嶺和尚が御選述になつた「宗門無盡燈論」といふ、修行の順序を示された書
 の第六段に、力用といふ表題を掲げて説かれてある語を借り來つたのであるが、然し
 老衲は其の無盡燈論にある事を諸君に紹介するのではない。單に題意だけを捉へて老
 衲の考を述べて見たいと思ふのである。

力用といふ文字上の解釋は申すまでもないことであるが、此の力といふ事に就いて
 は種々の意義があつて、物理學上では力の法則とか力學とか云つて、六ヶ敷い學説
 となつて居る。之れを精神上から解釋すれば、心理的に宗教的に又種々な説明の爲方
 もあるであらうが、今はクダ／＼しく述べ居る時間もないので、一般的に總括めて
 申せば、精神的力これを換言すれば物なり心なりの生命である。力は即ち生命なりと
 云つても、敢へて誤つた考ではあるまいと思ふ。天地間に於ける一切生物の生成發
 育といひ、自然事象の變化轉動といひ、悉く是れ力の表現ならざるはない。生命とは

一切事物象の運用自在なる作動それ自らである。それ故生命の外に一切事象の表現なく、力の外に一切事物の運用といふものは無い、即ち力(生命)即用と云はねばならぬ。

二 我宗に一法の施すなし

今日吾が佛教の状態を観るに、十三宗五十幾派と分れて、各々立教開宗の所依根據を異にして居る。經に依り論に依り、智につき情に基いて、各異その立場といふものがあるが、禪宗には所依の經論なく、吾が宗に言句なく一法の施すべきなしといふのが禪の立場である。若し有ると云は、お互自身に固有なる同等同一の佛性(耳障りであるが)であつて、之れも他から授けられたものでは更でない。然し今與奪の語を以てせば、奪へば一法の施すべきものはない。佛二代教説の糟粕を以て、所依の根據であるといふ様な事は決してないのである。釋尊は四十九年三百餘會の説法後「一字

不説」と仰せられたではないか。一步進んで與へて云は、如何。佛々祖々の經疏幾千萬卷も悉く之れ禪の所依ならざるはない。諸種百科の類、粗語細語皆これ所依の經であり所據の法である。第一義諦から申すならば、梅の小枝に小鳥の啼く音も、枯風にスレ合ふ裸木のウナリも佛の説法となる。蘇東坡が「溪聲便是廣長舌、山色無非清淨身、夜來八萬四千偈、他日如何舉示人」と詠せし如く、滾々として流る、溪聲も佛陀の説法となり、芙蓉の優麗なる相も毘盧遮那法身の顯現である。或は汗垢に黒すんだ姿も、夜の寒空に響く鍋焼うごんの哀れな聲も、將又隣の夫婦喧嘩も、悉く之れ禪の所依とせざるものはない。

三 禪は力を養成するもの

斯く説いて來ると、何だが禪といふものは取り止めのない、何でも御座れで不得要領の宗旨であるかの様に思はれるけれども決してさうではない。要するところ禪は力

を養成するにある。力は禪の専有ではなく、諸般は總て力であるが、その力を修養發展させ、押し進めて行くのが禪である。之れを世間の教へに當倣めて云へば智仁勇と云ふに外ならぬ。佛教では之れを戒定慧の三學と云つて、一佛法には必ず、此の三學を具備して鼎足をなして居るのである。然し各その専門とするところがあつて、一を主とし他を客とするといふことから、宗派分裂も生じた譯で、或人は淨土門は情を主とし、禪宗は意を主とし、他の聖道門は智を先とす。乃至淨土は美、禪は善、他の聖道門は眞を主とすといふ様な分方をして居るものもあるが、今強ひて禪の専門とするところを云へば力である。而もそれは仁と勇とを包容した力を養成するにある。然し只力と云つても、手には手の力あり、足には足の力あり、全身各々その長じた力を有つて居るが、禪は腹の力、臍の力を養成するのである。昔の人は松風を臍で聞くと云つたが、腹と云ひ臍と云ふはこれ即ち心と云ふに外ならぬ。彼の人は腹が大きいとか、彼れは腹に一物もつて居るといふ様な具合で、心のことを腹といふものに換用

するのぢや。或る婆さんが、禪宗坊さんを供養した。すると禪僧は遠慮なくウンと食つたと見えて、其の婆さん後日「禪宗の坊さんは腹を鍛へるといふが、全くさうだ牛の如に能く食つた」と云うた話があるが、何も大飯食ふのが禪の修行ではない。要するに禪は人間活動の原力即ち生命を鍛練長養するにあるのぢや。之れを具體的に強いて云へば腹の養成、心力の養成である。心力と云つては茫漠かも知れぬで、之れを今少し局言すれば、六波羅密中の精進力、換言すれば勇猛邁進する力を養成するのである。

四 大和民族の精華

我が大和民族の精華として、列國民に長じた精神は何かと云へば、此の偉大なる勇猛心であつて、武士道の本領は實に其の勇猛心の發現にあるのぢや。然し一途に勇猛心と云つても、匹夫野人の蠻勇ではない。智と仁との包容した勇猛心でなければなら

力 用

ぬ。此の武士的精神に最も能く契合したのが禪の宗旨である。禪宗が渡來してから殊に鎌倉時代にあつて、此の禪的修養工夫に依りて心力を鍊り上げた武人の多かつた事は、誰れも知るところであらう。雷に武士階級のみでなく、商人であれ、百姓であれ此の精神が刻み込まれて居るのである。要するに禪は斯やうな力を養成する、人間生活の全般に亘つて運用自在なる生命力を、修養し發展させるのである。然し如何に百萬言を列べ立てたところで、千萬卷の禪録を繙いたところで、抽象的に説明したり、先人の糟粕を窺つたばかりでは、何にもならぬ。自己自らに這箇如何と實參實究して初めて了得するところがあるのぢや。出息入息位を生命だとのみ思つたり、物を運び事を辨する丈が力だ位に考へるやうでは、眞に自己の面目を徹見する事は出来ぬ。先づ第一に眞參實究して、此の力を自覺し用ゐる得て生きて生命を現はさねばならぬ。

五 力の究極は慈悲心也

近來は青年學生の人が能く老衲の處に來て「私は記憶力が衰へ、忍耐力が薄いで困りますから、どうか參禪さして頂きたい」といふやうな事を云はれるが、そんな事も坐禪の副産物として現はれるかも知れぬが、入門の第一歩に於て、已に了見違ひをして居る。禪の本旨といふものは、決して神經衰弱の療法ではない。腦が悪いとか、身體の病氣とかなら、病院もあり、藥店もある。態々麥飯食うて參ずるには及ぶまいよ我が禪はそんなものぢやない。自己を徹見し、力を養成するにある。前述の通り勇猛精進の力を養成するのが、専門的に云へる禪の主眼である。然し此の勇猛精進の力は又その根蒂となるものがあるのぢや。佛の仰せに小兒は泣くを以て力とする。泣く兒と地頭には勝てぬと昔から云うてあるが、兒の泣く力も能く考へると實に味がある。婦人は怒るを以て力とする。成程平生は菩薩のやうに見えても、理屈でならぬと怒る、怒りては泣く、恨む。彼の千軍萬馬を叱咤して勇將項羽も、虞美人に泣かれては如何ともする術も知らなかつたといふ。女子と小兒は養ひ難しとか、少々ヒドい悪

口ではあるが、さうしたものと見える。其の當否は扱て措いて、沙門は忍辱を以て力とする。沙門とは僧侶の事であるが、此頃の坊さん仲間でも全然忍辱だとは云はれぬ。チヨイ／＼面白くない話しも耳にするが、兎に角も沙門は忍辱を力とする。國王は兵城を以て力とする、之れは申すまでもない。羅漢は精進を以て力とする。菩薩は慈悲心を以て力とする。此の慈悲心こそ力の究極であつて、勇猛精進の心も此の慈悲の力に依つて現はれる。吾人が禪の立場から、心の力と云うても精進力を養成するといふても、要するに此の大慈悲心を表はして、缺陷多き血まみれの世の中を救済して、永劫不亡の佛國土を建設するといふに外ならぬのである。力を養成すると云つても、坊さん風にせなければならぬといふのでは決してない。人々その立場々々に順じて、その妙用を現はして行かねばならぬのである。

叩けよ開かれん

一 向上の一路

朝は太陽が東天に上り、夕には西天に没する。晝明らかに夜暗く、日夜に同じことを繰返して居るのである。春が来れば花が咲き、夏が来れば緑が茂り、秋が来れば木の葉が散り、冬になれば白雪片々鷺毛の如きが散亂する。而して年毎に之れを繰返して居る。山簷え川流れ鳥鳴き蝶舞ふ。見來り稽へ來れば、吾人の周圍は不思議なことばかりである。だから、昔は、地震の起るのは地の下に大きな魚が居つて其れが身動きをするものだから、或ひは、また、希臘の神話にある如く、ブリュウトーといふ陰府の神が地下に在つて三叉の戈を揮ひ動かすからであるとかと、種々なことを考へて居たものである。ところか、年を経るに従ひ、経験を重ねると共に人智が進歩し、此の不可思議の幕は漸次に取り除かれ、人々は次第／＼に廣く眞理に觸れ得られるやうになつて來はしたが、然しながら、まだ、人の覺り得ない不可思議のことが宇宙

には充滿して居るのである。覺り得た場面といつては極々狭いものである。解つたやうでも世の中は中々解らぬ。俗諺に「此の垣一重が頑鐵の……」とか何んとか云ふ句があるが、此の頑鐵の垣に支へられて人々は眞理の大寶藏に入ることが出来ず、我利妄執の雲に包まれて東西に奔走しながら其日／＼を送つて居るのである。

然れども、嬰兒の乳を求むるが如く、眞理を尋ね求むる心の急なる人は、必ずや此の頑鐵を突き破つて眞理の大寶藏に至り眞理を握り得ることが出来るのである。昔、香嚴禪師と云はれた高僧は、庭を掃いて居るとき、帚の先きで掃き飛ばした小さな石が近くの竹籬に當つてカチリと音を發した一刹那に自己本來の面目を徹見し悟了せられたのである。これはニウトンが林檎の落ちたのを見て、其の一刹那に宇宙に引力あるを知つたと同じで、間斷なく眞理を尋ね求めて工夫を怠らなかつた結果である。耶蘇教のバイブルに「尋ねよ然らば遇ひ、門を叩けよ然らば開かるゝことを得ん。麵麩を求むるものに誰れか蛇卵を與へんや。」といふ句があるが、この事を云つたのであ

る。管子といふ書物にも、「之れを思ひ、之れを思ひ、又た重ねて之れを思ひ、之れを思つて得ざれば、鬼神將さに之れを告げんとす。」といふ語がある。共に意味は同一である。

此の眞理の大寶藏に向つて進むころを、「向上」と云ひ、向上する道筋を「向上の一路」と云ふのぢや。見よ、一滴の水も年久しくボタリ／＼と落ちて止まない時は、遂ひには大盤石にさへ孔を穿つたのである。人々も修養に修養を積んで、此の大寶藏に向つて向上の一路を怠らず進む時は、必ずや道筋に横はつて障礙となされ頑鐵の垣を突破し得て一大歡喜を得るの時期が到來するのである。

扱て、向上の一路をたどるに就いて、此の頑鐵の垣を突破するに就いて、それには種々の道具を要するのである。其の道具を使用し、また、其道具の使用法を研究し工夫するのが、即ち、修養である。その道具にも種類は種々にあるが、茲に老衲が見て以て最も必要なりとなすもの六つを擧げて、青年諸君の爲めに些か蒙を開うと思ふのぢ

や、道具の名をあげると、第一艱難、第二悔悟、第三信仰、第四博愛、第五感謝、第六希望である。

二 逆境は人を作る

第一が艱難である。艱難といふ道具は誠に結構な道具である。西洋の諺にも、「逆境は人を作る」といひ、支那にも「艱難汝を玉にす」と云ふ古語がある。人は金殿玉樓に住み、山海の珍珠に飽き、出入毎に多くの侍女に冊かれるといふ順境にある者は、之れを幸福かと云ふと決して幸福ではない。仕合者かと云ふと決して仕合者でもないのぢや。世間では之れを羨しく思ふかも知れぬが、其實、まことに氣の毒なものである。是等の人々は、眞理の大寶藏に到達する前に早く既に順境によつて殺されてしまふのである。昔から殿様は殆んど馬鹿と決めてある。殿様の如き順境にある者は、馬鹿になつてしまはぬ者は乏しいのぢや。昔から世間で云ふ「馬鹿殿様」の

語は全く事實である。順境にあつて尙ほ且つ怠ぬ人は餘程の偉人である。達人である。

逆境に在るといふと、此の逆境に打ち勝たうと努めるところに非常な力が生じ、之れによつて眞理の大寶藏に達する向上の一路を勇往邁進することが出来る。従つて大道を遮る。頑鐵の垣を突破し得るのである。貧困な家に育つた青年は不幸でなく幸福である。富貴榮華は人を瓦にするが、艱難は人を玉にするぢや。碌々親の温い懷に抱かるゝこともせず、三度の食事も粥を啜つて暮らさねばならぬといつた不自由の境界に生れた人は、決して不仕合せだ不運だと思つてはならない。これほどの幸運、仕合はないと神明佛陀に感謝せねばならぬ。かゝる境遇にあつて、之れを脱け出さう、他人の世話になるまいと奮然興起する間に青年は傑くなるのである。世界の平和と智識の増進に數億の金を寄附したと云はれて居るカーネギーも曾ては石炭擔ぎの賤業に幾多の艱難を嘗め盡したものである。我れ富みを得ん、富を得

て我が理想を實現せしめねばならぬと、一向専念、努力に努力を重ね、寢食を忘れて奮闘した結果は今日のカーネギーたるを得たのである。この事は嘗に一箇人に限つたことではない。國家にしても、亦た、其通りである。敵國外患無ければ國は却つて危くなるものぢや。我國が今日の隆盛を見るに至つたのは、日清戦争の大難難に堪へ、次いで三國干渉の屈辱を忍んで十年臥薪嘗膽の苦を積み、日露戦争の國事多端にも堪へ、遂ひに日獨戦争となり、旭日昇天の國運を見るに至つたのである。我國が斯くまで素晴らしい發展を來したのは、これまでの逆境が悉く藥になつたからである。然るに今日は此の順境が却つて國家百年後の災をなさぬとも限らぬ。深く憂ひに堪へぬ次第である。

三 瘦我慢を去れ

第二が悔悟である。凡そ人として過失の無いものは無い。過失を知つた時、直ちに

改めて再び眞理の寶藏に向つて大道を進まねばならぬ。然るに、多くの人が過失を知つても中々改めぬ。ア、悪かつた」と直ぐに頭を下げないで、「ナーニヤツつけろ」といつた調子で自己の非を遂げやうとするから困る。折角眞理の寶藏に向つて進んで來たのが、反つて背反して進むことになる。これを瘦我慢と云ふのぢや。瘦我慢といふ奴は甚だ善くない奴である。人は此の瘦我慢を去つてしまはなければならぬ。何事も瘦我慢を起して「俺は之れで可いのぢや」と威張り散らしては不可い。一旦、非と知りなば翻然として悔悟し、之れを改むるに憚るところがあつてはならぬ。孔子も、論語に「過つては則ち改むるに憚ること勿れ」と教へて居られる。悔悟すれば人間が小さくでもなるかのやうに考へて瘦我慢を發揮するのは大きな心得違ひである。大人物になると翻然悔悟して毫も憚るところはないが、小人物になると何處までも瘦我慢を押し通して、いよく横徑に深入りする。悔悟の遲速は實に人物の大小の依つて以て分るゝところである。あらゆる罪惡は自己を偽り、己れの非を非とせざるより發る

ので、斯くて罪惡に罪惡を重ね、遂ひには罪業の雲霧に掩はれて生涯真理の光明を認め得られぬことになるのである。されば、傳燈錄にも、

一切業障海。皆自ニ妄想ニ生。若人欲ニ懺悔。端坐念ニ實相。衆罪如ニ霜露。

慧日能消除。(一切業障の海は皆な妄想より生ず。若し、人、懺悔せんと欲せば、

端坐して實相を念せよ、衆罪は霜露の如く慧日能く消除す)

とある、苟くも真理の大寶藏に向つて向上の一路をたざらんとする人は、翻然悔悟する事を恥辱と心得るが如き瘦我慢の妄想をサラリと大海に投げて捨て、しまはねばならぬ。自己の過失を飾るが如き青年は智慧の足らぬ男である。過失と見れば直きに改めて憚るところの無い人間でなくては、到底、天下に立つて大事を遂げられ得ないのである。實に悔悟は其人の人格を偉大にするものぢや。自主自尊、自我の魂を尊重する天下の青年は、それ三思せよ。

四 信仰は知識の極度

獨逸の詩人ゲーテが「信仰はあらゆる知識の極度である」と云つた。知識が行き詰まつた時、眼前に横はつて居る頑鐵の垣を突破して真理の寶藏に進み入る智慧と力を與へてくれるものは信仰である。信仰は、之れを譬はゞ舟や筏の如きものである。人間の生涯は、「水の流れと人の身の……」と謠の文句にある如く、唯だ是れ生死の流れである。此の生死の流れを渡る舟筏は即ち信仰である。舟筏なくして江海は渡り得ざるが如く、信仰なくして人生の海を渡りおほせることは出来ないのである。世間で信仰といふと單に慰安を得て氣やすめになるもの位にしか解せられて居ないが、信仰は、單に慰安になつたり、氣やすめになるばかりでなく、大なる力となり、人をして活動せしむる大元動力となるものである。信仰は、人に勇氣を與へる。活氣を與へる。而して、人をして獅子奮迅の勢ひを振り起さしめるものである。信仰を得た人は飢ゑ

たる人が食を得たやうなものである。眞理の大寶藏に向つて向上の一路を慕進せんとする青年は、信仰なくして途中の障壁、頑鐵の垣を突破することは出来得ないのである。到底、それだけの力は得られないものでない。佛教では信仰を稱して、一に大覺とも謂ひ、此の大覺を得た人を覺者と謂ひ佛陀と稱する。大覺とは平易に言へば「さり」である。自覺覺他覺行圓滿の境地に至つたのが覺者即ち佛陀で、佛陀になつたほどの人は信仰によつて眞理を徹見する力があるので、決して、知識が行き詰まりになつてはしまはぬのである。向上の一路を慕進せんとする青年が信仰を要する所以はこゝである。彼のゲーテの言つた如く、信仰は如何にも知識の極度に相違はないが、それと同時に、また、知識の端緒である。絶対に空想を排斥して實驗を主とする今日の科學的研究法に於ても、基礎となるものは信仰である。信仰なくして辨異統同を行ひ得られるものではない。歸納も推理も批判も出來得るものでない。富貴も淫する能はず貧賤も移す能はざる道德的大勇猛心も信仰によらねば得らるゝものでない。ところで

此の信仰は然らば何んによつて得らるゝかと云ふと、それは宗教である。宗教は何んの宗派でも構はぬ。老衲は青年諸君に先づ宗教を勧める。

五 食らはんか船

今日の世の中は、水の上とさへ言へば到るところに蒸汽船があつて、まことに便利なものであるが、昔は乗合船といつて、老若男女が芋を洗ふ時のやうに、一つの船にゴツチャになつて乗り合ひ、大阪から伏見などへ淀川を上つたり下つたりしたものである。此の乗合船では、果物であるとか菓子であるとか或ひは酒、或ひは辨當ど、いろ／＼の食物を賣る者が船の中にあつて、乗合客の間を「食はんか」と呼んで持ち廻つたものである。されば、乗合船のことを、當時、一名「食はんか船」とも稱したものであつた。

我國の音曲に、「乗合船」といふ一曲があつて、よく正月の芝居などに演せられる

が、あれを見ると、乗合船のお客には、若旦那もあれば藝者もある。鳶の頭もあれば白酒賣もある。萬歳もある。店の若い衆もある。まことに千差萬別であるが、世の中といふものは、丁度、此の「食らはんか船」即ち「乗合船」そのまゝである。貴賤貧富、老若男女の乗合で、若し自己一人力みかへつて他の乗客に迷惑のかゝるのも構はず、我儘勝手に振舞つたならば、到底、納まりがつかず、人々は平和に其日を送り得られぬことになる。「四海同胞」とか、「人間は總べて皆な神の子なり」とか云ふ語は地球上到處で唱へられて居るが、如何にも其通りであつて、人類は悉く平等の者である。人種の差によつて隔てをなすべきものでもなく、邦を異にするからとて其間に差別的觀念を抱く可きものでもない。が、さて、實際問題に觸れて見ると、何うして中々さう理屈通りには行かぬ。父子兄弟でさへ、猶ほ牆に鬩ぎ、一族縁類相寄つて利益を争ふ有様である。平和の世界であるべき筈の此の天地が、阿修羅道になつてしまつて、今や歐洲に於ては屍山血河の大慘狀を呈して居る。昔の如く、文明の簡單であつ

た時代には、慈悲も普く行き渡つたのであるが、今日此頃の複雑な文明の時代には、電車に乗るにも戰闘的態度を取らねばならぬ。他人の迷惑も顧みず遮二無二押し込んで入らねばならぬ。汽車に乗つても、一人分の賃金しか拂はないで坐席は三人分ぐらゐを横領し、他人が寄り附かうものなら、恐しい眼玉で憎くさうに睨むといった状態である。こんな有様では世の中の前途が案じられてならぬ。「旅は道伴れ世は情け」といふ諺があるが、志ある青年が勇往邁進、向上の一路を辿り、眞理の大寶藏に入り込まうとしても、自己一人の力では容易のことでない。中々障壁たる頑鐵の垣は突破し得難いのである。世間の人々、老いたるも、若きも、男も女も互ひに相助け相寄つて、力を一つにして進めば、其力は非常に大なるものとなり、如何なる堅城鐵壁でも突破し得ないことはないのである。此の相助け相寄るところに博愛といふものがある。博愛とは他なし、他に臨むに慈悲を以てし、拔苦與樂の精神を忘れぬことである。人々に博愛の精神がありさへすれば、如何に物騒なる世の中でも、直に静まり返つて

しまふのぢや。而して此の博愛心は宗教によつて信仰を得さへすれば、自然に生じて来るものである。唯今、歐洲では阿修羅道を現出して居るが、これは歐洲に行はれて居る宗教に何處か行き方の間違つたところがあるからであらう。何れ戦争が済めば、必ず、歐洲の宗教界には、一大革命が起るであらうと老衲は思つてゐるのぢや。

六 境遇に感謝せよ

第五は感謝である。如何に勇氣があり元氣があつても、心中に愉快といふものが皆無であつたならば、到底、人は向上の一路を驀然に總べての障害を排除して眞理の大寶藏に突進することは出来得るものでない。如何に世間の人と和合し、博愛の精神を以て世を渡らうとしたところで、兎ても、それは駄目である。一日を暮らすにも、尙ほ、骨の折れるほどのものぢや。希臘の神話に、或時、神様達が、アルゴと稱せられて居る五十人漕ぎの船に乗つて、金毛探検の爲めにと出帆されたが、海上に於て船

が動かなくなつてしまつた。何うしても動かない。神様達は困り切つてしまはれた。すると、名をオルフォイスと呼ばれて御座る神様があつて、其の神様が提琴を奏されたところが、はじめて船が動き出したといふことである。人の一生もそんなものである。愉快といふことが皆無であつては、到底、人生の波は渡り得らるゝものでない。老年青年を問はず、悉く然りである。

然らば、愉快に其日を送り得るには如何いたしたら可からうかと云ふと、敢て絃歌を耳にし、酒池肉林の間に遊ばねばならぬといふ要はない。顔回の如きは、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在つて能く其の樂みを樂しんで一生涯を終られたものである。人は心の持ちやう一つで如何なる境遇にあつても無限の愉快を感じ得らるゝものである。それには感謝といふことが必要である。如何なる困難事が降りかゝつて來ても、如何なる逆境に沈淪して居つても、感謝して之れに接し、之れを迎へさへすれば、人は、皆な、愉快に其日を送り得らるゝのである。たとひ一枚の衣しかなく、ブル〜慄へ

て居るにしたところで、全く一枚も無いものに比すれば有難きことであると思つて感謝の意を起すがよい。澁茶一杯汲んで貰つても、ア、有難いと感謝して之れを受ける。さすれば、汲んで呉れた人も愉快なれば、汲んで貰つた者も愉快である。如何に酒池肉林の間に天下の美味を聚めたところで、自己の境遇地位に不平不満であつたり、他人の爲すこと言ふことが癪にさわつたりするやうでは、決して、愉快に世渡りは出来ないのである。落語家小さんが何時も能く語る「小言幸兵衛」のやうに朝から晩まで小言の絶間がないと云ふやうでは、自分の不愉快は素より附近の者の不愉快と苦痛は一通りや二た通りでは無いのである。

自分の不平不満を他人に對して當り散らしたところで、それは愚痴といふものであつて、何等の役にも立つものでない。徒らに不愉快を重ね、勇氣を鈍らす丈けのことである。青年は須らく愚痴をこぼさず、如何なる境遇にも感謝して之れに接し自己を切磋いてくれる恩人なりと考へ有難く感謝の意を致さねばならぬ。

七 極樂浄土に導く光明

感謝の外に、また、人をして愉快ならしめるものは希望である。この希望がなかつたならば人生といふものは真に無味乾燥のものであらう。青年が如何なる鐵壁をも之れを突破し、真理の大寶藏に向つて驀進し得るのは、希望を抱いて居るからである。一つの希望を達成しても更らに別なる希望を生ず、希望に續ぐに希望を以てし、絶えず連続せる理想を抱懷して居るからである。理想の無い人には進歩が無い。人に進歩のあるのは理想があるからである。

青年が逆境に立つた時、周圍から迫害排擠されたとき、此の逆境に感謝し、迫害排擠に感謝して「之れ皆な自己を玉にしてくれる他山の石である」との考へを起して勇往邁進なし得るのは、將來に理想があるからである。赫灼たる希望の光りが前途を輝らして居るからである。されば、苦をも苦と思はず、勞をも勞としないのであ

る。一步／＼と向上の一路を辿り、眞理の大寶藏に向つて進み得るのである。他人が鬼の如き態度で迫り、他人が悪意を以て我に接し來るも、我れは善意を以て之れに接し、佛陀の心を以て之れに對し得らるゝのは、皆な、一に希望があるからである。理想を有して居るからである。古歌に、

人を皆な吉野の花と思ひ見よ我を浪花のあじといふとも

此歌の如く、我れに希望さへあつたならば、如何に世間から虐待され、他人から罵詈謗譏されたところで、それをば吉野の花の美に對した如くに見てとり、悠悠迫らず、楽しく愉快な生活を營み得らるゝのである。希望は、人を此世からなる極樂淨土に導く光明である。青年が向上の一路を辿り進むに當り、常に希望を眼前に畫くことを忘れてはならぬ。希望を失つた青年は、遂ひに全く進歩の止まつてしまつた青年である。

婦人にんと參禪さんぜん

昔から、坐禪をする婦人で、傑れた者は尠くない。支那でいふと、劉鐵磨であるとか、臺山の婆子であるとか、「婆子燒庵」といふ古則に現はれた婆子、扱ては徳山和尚を金剛經の一節でやりこめた婆子、蘇東坡の妹も中々の傑物であつた。我國でいふと、檀林皇后を始め、奉り、慧舜尼、太平尼、愚仁尼、千代野、蜷川新右衛門夫人、慧昌尼、元聰尼、宜詳尼、見泥尼、智教尼、純圓尼、お察婆、原驛婆子、杉山政女、茶店婆子、奈良屋歌女等、擧げ來つたならば澤山にある。近頃に至つて斯かる力量のある婦人が有るか否かは暫く措いて、兎も角、婦人の參禪者が頗る多いといふことは事實のやうに思はれる。

併し乍ら、老衲が一個の考へを以て見ると、「信仰」の無い婦人が、幾ら坐禪をやつたからとて、其れは何んの役にも立つものでない。否や、此事は、婦人に限つたこと

ではない。男子と雖も亦た固より然うであつて、今、若し、禪宗から「信仰」を取り去り、參禪者から「信仰」を取り去つたならば何うであらうか。苟も、禪を修行する者は、先づ、此點を回光返照して、自分の履むべき道を迷はぬやうにせねばならぬ。「坐禪をするものは、古則公案さへ透過すれば、それで可い」と思つて、無暗に、其れから其れと公案を數へる婦人がある。恰も、公案をば「謎」か「考へ物」でも解くが如くに心得て居る。甚だ、不心得のことゝ云はねばならぬ。あゝ、汝の信仰は何處へ行つたか。

信仰なるかな。信仰なるかな。汝の信仰を固めよ。眞個、得道の人たらんと欲したならば、必ずや大なる信仰によらなければならぬ。公案を透る透らぬは、第二の沙汰であつて、公案を授かつたならば、其れを自分の生きたる守本尊となし、生命となし日常、行爲の發源地となして、行住坐臥、着衣喫飯、總ての行爲の上に油断なく練らなければならぬぞ。

公案を次ぎから、次ぎと矢鱈に透過させたところで、有害では無いまでもが無益である。これは老衲が多年の經驗にてらして固く信するところぢや。

全體、參禪者が、碌に坐りもせず、骨も折らないで、自分の頭でフラ／＼と考へた萍妄想を有つて入室し、まるで、師家の居る室内をば塵捨場のやうに心得て、くだらぬ「異解」を打捨つて出て行く。何うして禪の根本意義に觸れ得るものぞ。「信仰」が足らぬからである。大信力があつて、大決定をして、我が爲めに蓋天蓋地し去る丈けの働きをもつて來る者の無いのは、一體、何うしたものであらう。歎はしき至りである。

ちよのぶがいたゞく桶の底ぬけて水たまらねば月もやごらさず
といふ風に、一旦、豁然として悟つた後は、悟り得た力を悟とせず。かたちを變へて婦人に相應した事業に力を注がねばならぬ。即ち家政のことを始めとし、慈善事業であるとか、教育事業であるとか、扱ては感化事業であるとか、盡くすべき事業は實に

澤山にある。それらの事業に向つて、隨所に此の得力を發揮するといふことが、一番肝要であると思ふ。

坐禪をした婦人の中には、随分、御悟りくさい、いやなことがある。甚だ苦々しきことである。唯だ、信仰に基きて、言、行ひを顧み、行ひ言を顧みて、何處までも婦人の婦人たる徳を發揮して貫ひ度いのである。

隠れたる徳行

一 大功德は無功德に同じ

徳行とは「善い行ひ」といふことである。近來、一日一善など稱へて、善行を獎勵して居るのは、まことに喜ばしき次第である。全體、教育といふものは、學と徳とを

併せ修めしむることを目的とするのであるが、兎もすれば、偏輕偏重して、知識を啓くことに専念し、較もすれば徳行を修めしめるといふことを遺忘する傾向があるのは大に注意すべきことであると思ふ。

凡そ、善行は、これを二つに分つことが出来る。一を「積善」とし、一を「隱徳」とする。而して、宗教的善行は、隱徳に屬するものであつて、報酬を求むる心の無い善行が隱徳である。然るに、人の情として、小善も廣く傳はらんことを希ひ、大惡も人に知られざらんことを望む弱點がある。これは甚だ善しくない。「左手に善事を行つて右手に知らしむる勿れ」といふ箴言もある位で、隠れたる善行は、絶對的の善行である。右手に與へて左手に受けんとする相對的善行は卑しむべきものである。

梁の武帝と云へば、學問に造詣深く、悟道また尋常ならざるものあり。佛心天子と呼ばれて、數百卷の著書を遺されたほどの人であるが、或時、達磨大師に向ひ、「朕は寺を建て僧を度し、其他、あらゆる善根を施したが、これに對して如何なる功德があ

るであらうか」と尋ねられた。大師は聞かれるや言下に「無功德」と答へられた。これは、大なる善行には報酬は無いものであるとの意味であつて、大師の喝破されたところは、流石に其の眞を誤らない。無功德は取りも直さず大功德である。小に比較した大と云ふのでは多寡が知れて居る。絶體無限の大は虚無に等しいもので、無限大の功德は無功德と同じである。例へば、太陽が萬物を化育するや、何等、報酬を求むるの心を有せない。太陽に其心を有せなくとも、物象は悉く太陽の大功德を認め、太陽の大功德を語り合つて居る。太陽の此の無限大なる善事に對しては、功德として計量し得られるものがない。即ち無功德である。功德を求めざる善行は實に清々しいものである。

二 隱徳を冥々の中に積み

書を讀んで子孫に遺す、子孫それを讀まず、金を積んで子孫に遺す、子孫これを守

らす。隱徳を冥々の中に積んで、子孫に餘慶を享けしむるに如くはないのである。然るに、今人、多くは、子孫の克く守らざる金を蓄へ、或は書を積んで遺さうとはするが、隱徳を施さうとする者は甚だ稀れである。男爵を授けると云へば、一議に及ばず金を出す成金はあるが、隠れたる善行を心懸る者は至て少ない。近來、いろ／＼の社會的事業に資財を投ずるやうな篤行もほつ／＼耳にはするが、功德なきに喜捨するものは餘り見當らぬ。釋迦にしる、基督にしる、將た孔子にしる、後世から教祖と仰がる、所以のものは、世の爲め人の爲めに一身を犠牲に供して教へを弘通されたからである。此等の人々は、決して、報酬を望んで力められものではない。釋尊が富四海を保つ底の王者の榮耀を棄てられたのは、何も報酬を望まれたのではなかつた。楠公の赤心も、報酬の爲めに捧げたのではなかつた。若し然うした心懸けであれば、七たび人間に生まれて國賊を滅ぼさうなどと云ふ悲壯なる言葉が發せらるゝ筈がない。否な楠公にして報酬を望んだならば、他に幾らも好い方法があつたに違ひない。彼の北條

時頼が身を雲水に窶して諸國を遍歴し、民情を視察したのも報酬を受けんが爲めではなかつた。時頼は夫れ程せずとも意のまゝに自己の欲求を充たすことが出来たのである。又た相摸太郎は元寇を殲滅して國難を救うたが、位は從五位に過ぎなかつた。北米合衆國の國祖ワシントンは、大功業を就し遂げて而も自ら其功に居らず、獨立戰爭の終りたる後、國民議會に於て、議會はワシントンの勳功を頌した時、ワシントンは之に對して答辭を述べんが爲めに起つたが、彼れの肢體は戦ぎ、唇は顫ひ、嗚々として立ち竦んでしまつた。これを見たるロビンソンは、ワシントンの心事を了解し、謙遜の徳を稱へて其場を取繕つた。ワシントンほどの勇士が、其の勳功を表彰されて、恰も群集の前に連れ出されたる野嬢の如く羞んだと云ふのは、畢竟、彼れの大功業に對する報酬を豫期しなかつたからである。然らずんば彼れは誇りに答辭を述べたであらう。

馬琴やセキスピアの著作やラフエラーの作品を見ても、名人巨匠の心がけは凡人の

企及し難い點がある。馬琴の小説を讀むと、近來の思想と合はない節もあり、殊に總體の調子が古めかしいとは云へ、能く人情の機微に觸れ、讀者を魅了する力を有つて居る。繪畫の如きも、新しいものは其形は整つて居るが、これを熟視すると氣魂が無い。古名人の描いたものは、其人の精神が畫圖の中に生きてゐるやうに思はれる。夫れも道理、古名人は畫の爲めに畫を描くので、阿賭物の爲めには描かなかつたのである。

三 伊勢の畫僧月僊

昔、伊勢に、月僊といふ僧があつて、畫家として知られて居つた。知るに、僧侶の身を以て甚だ錢を愛し、人の畫を囑するあれば、必ず禮金を受けて描いた。其の態度の卑劣なること言語同斷で、時人に指彈されつゝ、平然として意に介しなかつた。而して、指彈するものも亦た月僊の畫は認めて居つた。或時、某處の遊女の頼みを受けて

其女の腰巻に描いてやつた。若し、氣骨のある畫家であつたならば、無論、描く筈はないのであるが、月僊は一向頓着しない。描き上げた畫を自身、遊女が許に持參して謝金を請求した。遊女は、心あつて爲たことか知らぬが、金を足に載せて月僊の前に差出した。月僊は難有しとばかり、其金を受け取つて歸つた。斯くの如く、金に對する月僊は、殆んど、恥も外聞も無い狀であつたが、其の死後、月僊は集めた金を悉く散して鰥寡孤獨を賑恤し、一厘も貯蓄しなかつたことが判り、人々、皆、奇異の感に打たれたといふことである。想ふに、月僊の爲人を卑みつゝ、尙ほ頼畫者の多かつたのは、畫の出來が好かつた爲めで、良畫の出來たのは、月僊が報酬の爲めに描かなかつた爲めである。成程、畫代を受け取つたには相違ないが、夫れは慈善の爲めに取次ぎをしたに過ぎない。

是れを要するに、隱徳即ち報酬の爲めにせざる善き行ひは、大乘教の教義に合つたもので、我が禪宗でも大に之れを奨励してゐる。而かも、近來、清廉の風、地を拂つ

て、報酬なきに善い行ひをする者が少い。例へば、彼の勞働も自己の務めとして忠實に之れに従事するときは、勞働は神聖なりとも云へやうが、其の勞働の對價として、即ち、勞働の結果として報酬を受くるにあらずして、單に報酬を得んが爲めにする勞働は神聖でも何んでもない。英國の敵は英國の富その物であると喝破した者もある位で、富は必ずしも其身其家を幸福にするものではない。由て、人は隱徳を冥々裡に施し、獨自一個の爲めならずして社會的に存在するといふ心懸けが必要である。

誠の心

一 自ら欺かざれ

明治天皇の御製に、

誠の道

目に見えぬ神に通ひて耻ぢざるは人の心の誠なりけり

と仰せられてある。まことに、萬代不易の御教訓であつて、同時に、宗教的大説法である。云はねばならぬ。また、

さしのぼる朝日の如くさわやかに持たまほしきは心なりけり

とも仰せられて居る。尙ほ、御製と列しては、畏れ多い次第であるが、菅公の作と傳へられ居る彼の

心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らむ

は、吾人が、日々、心行の龜鑑として仰がねばならぬ大精神である。茲に「誠の心」と仰せになつたのは、所謂「欺かざる心」であつて、佛法の戒法上から言ふと、「不妄語戒」である。自心を欺かず、妄語を發せないといふことは、中々、難いことではあるが、此の「誠の心」即ち「欺かざる心」こそ、吾人が本心本性であつて、此の「誠の心」の發するところが宗教の本義に契ふのである。此の「誠の心」といふ大精神を

以て、お互ひの心を練り、行ひを磨き、日々、向上の道程を辿らねばならぬ。曾子は「日々、吾身を三省す」と曰はれたが、三省の三は、三度びといふことでは無い。屢ばといふ意義であつて、時々、刻々、自己を反省して、本來、清淨無垢の自性に曇りかゝらぬやうにせねばならぬ。

二 心は明鏡臺の如し

心は明鏡臺の如きものである。自心を欺くといふことが無かつたならば、人生の苦樂浮沈、何物か吾人の爲めに憂ひをなすものがあらうか。全體、人の、此心といふものは、刹那々に遷り變つて、彼れを思ひ、此れを考へて止む時がない。其の遷り變つて行く刹那には、兎角、自心の光明が覆はれて、外物の爲めに自ら欺かしめられ易いものである。世間の人は、宗教とか信仰とかいへば、御經の中にあるものだ。お寺へ行かなければ得られぬものだ。僧侶に會はなければ求められないものだと思つ

て居るやうであるが、それは大きな間違ひである。決して、わざわ／＼ソナナ處に求めなくとも、自己本心の發露するところ、其處に、宗教は躍如として現れて居るのである。

夜もすがら佛の道を求むれば我が心にぞ尋ね入りぬる

で、喜怒哀樂に妄動して居る迷ひの心の中に、信仰はチャンと現はれ、道はチャンと存して居るのである。太宗皇帝は、

「人は銅を以て鏡となす、我れは人を以て鏡となす」

と云つて居られるが、實に、味ひのある言葉である。他人の善悪は、直ちに悉く自己の教訓となるものであるが先方が我れを憎悪し、我れに敵對するならば、我れは其れを敵とせず、寧ろ、彼れを愛すると共に自己を反省するがよい。其時、己に、自己に對する災禍は免れ得て居るのである。憂ひを轉じて樂みなし得て居るのである。惡人を救ひやるといふことは、佛菩薩の御心である。親は、不孝なる忤はご可愛ゆくて

ならぬと云ふが、佛菩薩も亦た惡人ほど、ますます、慈悲を垂れて救はんとなさるのである。淨土門では、彌陀如來の懷に凡夫は抱かれて居る。善人すら猶ほ往生す、現んや惡人をや」の意味は、その邊にあるのである。

斯くの如くに、自己本心の中に、此の信念が生じたならば、「誠の心」即ち「欺かさる心」尙ほ云ひ換ふれば「宗教的眞心」である。此れが、自然と現れて來て、管に、自己一身が闇迷の苦境から脱し得るのみでなく、更に進んで偉大なる生命を發揮するに至るのである。

三 死は刹那の安息

世人は、死を以て、人生の一大苦痛として居る。併しながら、生死は丁度晝夜のやうなものである。晝は活動く時であつて、夜は安臥する時である。毎日、業務に夙精して居るところは即ち生の活動であつて、毎夜、睡眠に就くのは即ち人生の死滅であ

る。生は舞臺に上つた時であつて、死は樂屋に安息んで居る時である。別に、生として樂しむ可きところも無ければ、死として悲しむ可きところも無いのである。蓋し、夜々の安眠は明日の活力を蓄養するもので、人生の死は亦た更に偉大なる生命を永遠に致さんとする刹那の安息でなからうか。此の宇宙が、時間的空間的に於て無限なるが如く、吾人も亦た無限なるものである。此の信念あり、始めて、生命の價値、人生の意義は生するのである。自己を欺くの心行は、吾々が要求して止まぬ無限の大生命を實現するに最も障害となるものである。誰れしも悪夢の爲めに、夜中、熟睡することの出来なかつた時には、明日の活力に大なる障害を來すに違ひない。吾人の心行が平常に於て邪惡の爲めに妄動して居つたならば、亦た、決して、安樂にして偉大なる生命を實現することは出来ないのである。自心を欺かず、誠の心を持ち、固き宗教的信仰に生きて居る者であつて、始めて、無上の大安樂は得られるのである。

四 宗教は厭世的のものに非ず

世間で、宗教といふと、直に、世間離れのしたものの、現世の役に立たぬもの、厭世者の信ず可きもの、現代に活動せんとするものには却つて害あるもの、やうに思はれて居るのは、甚だ了見違ひのこと、云はねばならぬ。宗教とは、前に述べ來つた如く『誠』の教へである。自己に確固不拔の元氣を涵養する教へである。『誠の心』とは宗教心である。宗教心の無い人間は「誠の心」の無い人間であつて、「誠の心」の無い人間は、何うして、今日の煩鎖なる社會に立つて行くことが出来やうか。宗教は出世間であると共に、大いに現實的である。世間的である。治生産業みな之れ宗教心の發動でなくてはならぬ。「誠の心」の發露する所に治生産業は完成するのである。現代社會の渦中に投じて、萬難を排除し、立派に事業を成し遂げるの元氣は、宗教的信仰によつて得たる眞面目なる大勇猛心でなければならぬ。此の大勇猛心は「誠の心」の發

動である。吾人、若し、自ら省みて一毫の疚しきところなく、一點の自らを欺くところがなくつたならば、自ら心廣く體胖なるものがあるであらうが、若し、此れに反したならば、決して、社會の表面に立つて、公々然と活動することは出来ないのである。虚偽を以て世間の風習であるかのやうに云ふものは、暗中飛躍を以て、一生涯を太く短く暮し、終ひにはのたれ死でもしよう云ふ馬鹿者其の妄語である。まことに嘆ず可く慙む可き考へと云はねばならぬ。吾人は、たとひ、臥薪嘗膽の辛さであらうとも如何ばかり赤貧の苦に泣かうとも、一點曇りなき清空を仰がねばならぬ。而して、自心の光明を自覺した時には、如何に言ひ知れぬ歡喜と大元氣とに満たさるゝことであらう。

五 唯だ誠の心を發せ

斯くの如く宗教といふものは、人に慰安を與へるばかりでなく、處世上最も必要な

る活力を涵養するものである。世に、英雄豪傑と云はれ、聖人君子と云はれる人達は多くが貧窮身に迫る家庭に人となつたものである。此等の人は、他から動かさんとしても動かすことの出来ない堅き信念を有して居つて、社會の事物と闘ひ戦つて遂ひに勝利を占め得た人である。ところが、先祖代々の遺産に生き、安樂の中に人と爲つたものは、社會の何物なるやも知らず、我儘な放縱生活を來て居るから、自己の心に落付が無くブラ／＼として更に緊張したところが無い。されば、一朝、事が起つて、昨日の榮華は夢と化し、今日は辛き憂目を見なければならぬといふ時になると、悲觀、懊惱、手も足も出でず、遂に自己の破滅を來すことになつてしまふのである。かゝる事は容易に無いやうなもの、世間の萬事に意を留めて見て居ると、吾々の一身といふものは、深淵に臨めるが如く、薄氷を踏むが如き状態にあることに氣注ぐであらう。焼けば灰となり、費消すれば失くなる家屋や財寶は言ふまでもないこと、分散すれば影さへも見せぬといふ四大假和合の身を以て、何を頼りとし、何處が安樂

な積りであらう。有爲轉變は古今の常規である。今日あつて明日なき生命を知つたならば、頭燃を救ふが如く、自性を徹見し、早く大生命を自覺して無限の得果を成就せなければならぬ。此のところに氣の注いた時は、早や宗教心の發露したものである。而して、高大無邊の大精神など、云ふと、甚だ偉いもの、やうに思はれるかも知れぬが、此れを求むるのは易々たるものである。曰く、唯だ誠の心を發せちや。誠の心を發せば、其處に、自己と大宇宙との精神がビタリと合するのである。自ら欺かざる此の誠の心は、吾人の不完全なるものをして、完全圓滿なる、至大、至高、無限の大生命に合致せしむる所以の道その物である。

六 穢土其儘が淨土

人は萬物の靈長であるといふが、凡ての方面に於て、悉く他動物に勝れて居るといふ譯けでは無い。人の歩みは馬の早きに及ばぬ。人泳ぐと雖も猶ほ魚の泳ぐには劣る

人は精神あるを以て他の動物に勝ると云つても、禽獸にも劣る振舞ひが社會の到るところで溢せられて居ないでもない。一例を以て云ふと、他の動物の生殖作用は自然的である。決して、無理なところが無いが、人間になると中々さうでない。唯だ、社會の制裁を恐れて人間らしくして居るといふまでである。夫れで、若し、その羈絆がなかつたならば、落花狼籍、まことに目も當てられぬ醜行が演ぜられるに決つて居る。實に淺間しきことである。凡そ、人と生まれたからには、何等か意義ある生活を營まねばならぬ。宗教の必要は然う云ふ點から自然に起つて來るのである。死人を取扱ふのが宗教者の天職ではない。少くとも、世人をして、他の動物と違つて、人間らしい人間たらしめ、此の人生を有意義にしたいといふに外ならぬ。

樂しみは夕顔棚の下涼み

といふ句があるが、まことに然うである。たとひ、金殿玉樓に住る、絹や錦に身を装ひ飾つても、それで必ずしも眞の樂みが得られるといふものではない。朝から晩まで

汗水流して働いたのちの一合の晩酌は如何に大なる慰安を與へるであらうか。夫婦共稼ぎで炎天に車を引く時、一樹の下に休息をする五分間は如何に楽しいであらうか。吾人は如何ほど碎身の苦しみがあつても、確固不拔の信念を抱き、自心を欺かざる誠の道を辿つて居つたならば、此の穢土そのまゝが淨土であり、汗垢に汚れた此身そのまゝが佛身であり、一舉手一投足、悉く、之れ佛作佛行ならざるなきを自覺するであらう。

衲が座右の銘

一 與へる者と受ける者

凡そ老衲共の經驗によると、「與へる」と「受ける」この二つの場合、詰らぬ事柄でも或

者は善人之を受け、善く我身の爲めとするが、如何に善き事柄でも、受手が悪いと良い結果を來さないものである。老衲は、今、茲に、老衲の「座右の銘」を掲げ、これに就いて一場の御話をするにしたい。若し、受ける諸君が能く之を味はつて下されたならば、多少なりとも諸君は自身を益するところがあらうと思ふ。先づ、「座右の銘」を掲げる。

座右の銘

- 一、早起未更衣静座一炷香
- 一、既著衣帶必禮神佛
- 一、眠不違時食不至飽
- 一、接客如獨處獨處如接客
- 一、尋常不荷言一言則心行
- 一、臨機勿讓當事再思

- 一、勿_レ妄想_二過去_一遠慮_二將來_一
- 一、負_二丈夫之氣_一抱_二小兒之心_一
- 一、就_レ寢如_レ蓋_レ棺離_レ褥如_レ脫_レ屣
- (一) 早_レ起きて未_レだ衣を更へざるに静座すること一炷香せよ
- (二) 既に衣帶を著けなば必ず神佛を禮せよ
- (三) 眠は時を違へざれば食は飽くに至らざれば
- (四) 客に接するとき獨處るが如くせよ獨處るとき客に接するが如くせよ
- (五) 尋常_レ苟も言はざれば言は_レ必ず行へ
- (六) 機に臨みては讓る勿_レれ事に當つては再思せよ
- (七) 妄に過去を思ふ勿_レれ遠く將來を慮れ
- (八) 丈夫の氣を負ひ小兒の心を抱け
- (九) 寢に就くとき棺を蓋ふが如く褥を離るるとき屣を脱するが如くせよ

此の「座右の銘」といふことに就いて一言すると、「座右の銘」には色々ある、われわれが古人の傳記を繙いて見ると、偉人と云はるゝ人は一面必ず何等か家訓とか一身の上の座右の銘とか云ふものを有つて居る。さうして其れを、朝夕、我身我心から放さず居るやうに思はれる。或ひは、單に、箇條書きになつて居るものがある。老衲は、今日まで、古人の「座右の銘」といふものを色々お話ししたけれども、昔の人は……今でも然うであらうが……平素自己の心に細心の注意を傾けて居る。其れだから其の「座右の銘」なるものも實に徹底したるものである。そこになると、老衲の「座右の銘」などは大方諸君の前に掲げ出されたものでない。甚だ耻ぢ入つたものである。元々、これは、老衲が私かに拵へたものであつて、これを實地吾身に行ひ／＼して先づザツト九箇條ばかりのものになつたのであるが、大言壯語して、これを吾身に行はぬとあつては實に心中に懼れを抱く。併し、此の「座右の銘」が、老衲の許に來て道を學ぶ人達に、其れとはなしに話したのが終ひに、公になつてしまひ、若い學生達に問はれるまゝに

段々これを明かすやうになつて、内密で拵へたものを、人前に出て話すと云ふ具合に大分、大膽になつて来た。甚だ不遜のやうではあるが、老衲の心では些かも不遜驕傲の意は無いのである。若し、老衲が此の「座右の銘」を見て、諸君の中、一人でも二人でも、其れは可い。自分も行つては居るが、尙ほ、一層行つて見よう。云ふ人が出来たならば老衲の太いに仕合として喜ぶところである。以下、老衲が精神の存するところ丈けを、此の箇條について思ひ起すに従つて話して見よう。

二 事業の成否は出發點に在り

第一は早起きである。お互は毎日バタ／＼やつて忙しく暮して居るが、老衲は老境に入つた故か、早起きと云ふことは、さまで辛くなつた。若い時は早起きは出来なものであるが、社會國家の爲めに偉い仕事を成し遂げた人々の有様を考へて見ると、早起きと云ふことは、確かに其等の事業を成し遂げた一つの要素である。今では何事も

心なき人は、善惡を選ばず外國の風を輸入し、之を模倣すると云ふ有様で、遂ひには朝寢と云ふ甚だ厭ふべき陋風までも眞似する傾きがあつて、書生の間にまでも、さう云ふ様な事を殊更に見習ふ輩が以前は随分あつた様に思ふ。

夙に起きるといふことは、言はゞ一日の之が始めなのである。古語に、一年の計は一月にあり、一月の計は一日にありとあるが、詮じ詰めれば一日の計は必ず一朝にある。もう一つ其の奥もあるが、それは言はぬ方がよからう。一年の間に或る仕事を立派に仕上げると、仕上げざるとは、實に最初の出發點の如何に在るのである。それは一寸の機會からであつて、其の機會を捉へるも逃がすも、亦、一寸の違ひからである千里の道を行くにも必ず一歩から初まる。物の出来ると否とは、ホンの僅かの違ひなものである。滴水も集まり菟まりては懸て河となり湖となり、大海となりて漲天の勢ひを成すといふ有様、こんなことは分り切つた事ではあるが、大いに味はふ必要があらうと思ふ。人間の一生は一日々々を段々と繼續して行くものであるから、去年あり、

今年あり、明年あり、昨日あり、今日あり、明日ありと云ふ次第であるが、能く考へて見ると、昨日も今日、明日も今日、明後日も今日、去年も今日、今年も今日、また其の来る年も今日である。一日は必ずしも二十四時間と云ふ時間に限られたものではない。すつと今日々々を積み重ねて行くが人間の一生、そこで古人の所謂「死して後止む」と云ふところに到着する譯けである。其所になると、筆持つ人なれば、筆を持つたまま、で瞑目して夫れで澤山である。又、鐵砲持つ人なれば、鐵砲持つたまま、で死んでしまつたところで些かも遺憾はないのである。算盤弾く人なれば、算盤弾いて居るなり息引きとつても、其れが本願であらうと思ふ。ところが、せめて、死ぬ時ばかりは座禪でも組んだま、確かり口も噤んで立派な死にざまを爲て見たいと云ふやうに考へて居るものもある。満更、悪い考へではないが、甚だ迂闊な考へと云はねばならぬ。所詮、人間と云ふものは己が職分と共に斃れたら、それで立派なものである。今の若い身空を以て死ぬ時を考へて居るやうな違は有たぬ筈である。朝から晩まで、孜

々砧々として、奮闘し、努力し、向上して已まぬ精神を有つて居るならば、便所で力んで居りながら、其儘息引きとつても遺憾なしである。或ひは、また、一種の病氣に取附かれ、七顛八倒、逆さ立ちに成つて死んだとて之れも別に遺憾なしである。一向の信念と云ふは其所にある。兎に角、五十年でも百年でも幾千萬年でも考へて見れば一日である。昨日だの昨年だのと色々過去があるやうだが、皆、今日であつて無始無終である。我が宗教の立場から言ふと、元來、生だの死だのと云ふことは無いので、死と生とは夜と晝である。死と生は、過去に遡つて考へても、また、未來に向つて考へて見ても、所謂、生死一如なんである。少し理窟めいて來たやうであるが、敢て理窟を言ふ必要も無い。生即死、死即生である。かう論ずると生死論に及ばなければならぬが、それはしばらく措くとする。扱て、何處で何を爲ながら何んな有様で死なうが、自己の職分に終始し得たものならば己れにあつては些の遺憾なき次第であつて世人が斯る心掛けを有せんとするには何うしても朝早く起きて、十分に之を考慮する

要があらうと思ふ。ところが、朝起きは中々難いもので、殊に、寒い時には、目覚めても枕を蹴つて起ると云ふことは、随分、困難なものである。けれども、物事に成功しようと思ふ人ならば、必ず之れを實行して渝らないといふことが必要である。それに就いて、老衲は、今通俗であつて、而して意味の深長である徳川家康公の言葉を思ひ出した。

或時、家康公が自分の居間に休息んで御座ると、近侍の者どもが四方八方の話をしながら、頻りと金のなる木といふことを言つて居る。昔から金のなる木と能く世間で言ふが、米のなる木は見たことがあるけれど、金のなる木は未だ見たことが無いなどと、打興じて居るのを、家康公ちらりと耳に挟まれ、「者共は面白い話をして居る、金のなる木を知らぬとあれば俺が教へて遣はさう」と、筆取寄せて白紙の真中へ書かれたのが一本の棒、さうして其の左右に枝のやうなものを一本づつ、書かれ、右の方には正直、真中に早起、左の方に働きたいふ字を現はし、「これが金のなる木ぢや、能く見届

けて置けよ」と示された。寔に味ひがあり、實に能く練れた言葉である。後に、これを刷物にして臣下に與へられたと云ふことが或る書物に見えて居つたが、もう一つ面白いのは、彼の天海僧正のやられたことである。「成程、大御所は道がに偉い、善いことを説示されたが、愚衲も一つ教へてやらう」と云ふのは、金の散る木は何んなものかと示された。まことに、金の散る木は天下にドツサリ有る。金のなる木を知つた上は、金の散る木も知つて置かねばならぬ。そこで、天海僧正は、矢張、一本の棒を引いて二本左右に枝をつけ、一番頭に書かれたのが嘘つき、其の傍に短氣、片つ方には格氣と書かれた。家康公のも天海僧正のも何れも通俗だが眞理を道破した語である。嘘つきは一番悪い。嘘は總ての悪しき行ひの始めである。殺人だの姦淫だの強盗盗だの、其他、罪惡の源を訊いて見れば、嘘を吐くことが土臺になつて居る。嘘も方便など、云ふ誠に淺薄な考へから、一時逃れの間に合せを言ふのが一番悪い。また、假令、罪人どまで成らずとも、政治家でも實業家でも、其他、總ての階級の人が、所謂

權謀術數敵に一時を胡魔化さうといふ考へが動機となつて行つた仕事は、到底、駄目である。結局のところ、正直でない物事の終りを全うすることが難い。一國の外交などにしても老衲はさうであらうと信ずる。外交の秘訣は嘘を吐くにあらずして正直なところにあるべき筈である。そこで、世間には、嘘から出た真、真から出た嘘といふことがある。時には、誠心誠意から發したことが、他人には嘘のやうに思へることがあるが、それは嘘にして實は嘘ならずである。ところが、始めから、何か心にたくらむ事があつてやる事は、表面は真のやうに見えても決して永續はしないのである。佛典には二枚の舌を使つてはならぬと八釜しく戒めてあるが、彼の蜀山人などは、餘程經文を見たものと見えて、難解な經文の言葉や意味をば、極く通俗な言葉として、嘘から出た真、真から出た嘘……嘘と眞の仲の町……迷ふも吉原、悟るも吉原……などと言つて大分洒落た言葉を遣うて居るが……いや此れは思はず横道へ這つた、……兎に角、一番最初が大事である。人間の活動の初めは朝であるから、出来る丈け早起き

ををする習慣をつけねばならぬ。

老衲の所に居る小僧達も、なかく早起きを爲るのが苦しうである。ちつと位は睡眠不足でも、思ひ切つて早起きして見ると、追々習慣になつて、一向辛くななくなつてくる。命令を受けてやるのぢやない。「吾が物と思へば輕し笠の雪」で、外目には、さも重さうに見えても、吾が物と思へば、さまで重くは無い笠の雪である。西洋人の遣方はいざ知らず、吾々東洋人、就中、日本人は早起と云ふものを名物として、是非、實行して見たいものである。どうも遅く起きると、一日仕事に追ッ掛けられて居るやうな氣がするが、二分でも三分でも、一寸、人より先きに起きると、續々として湧いて來る仕事は、こちらから追ッ掛けて愉快に一日を送り得られる。大分、趣きが違ふのである。初めの出發點が一番大事ぢや、其れだから、昔の偉い人も、汝等諸人は十二時……今は二十四時間だが、昔は十二時間、詰り一日といふこと……に使はれて居るが、俺は十二時を使ひ居ると其の弟子に申されたといふことである。左様なくてはならぬ。

金を使つて道樂する者は、それは金に使はれて居るのである。死金を使ふのは實に愚の至りであるが、他人の爲めに、或ひは、社會の爲めに金を使ふのは、金を生かして使ふのであつて、同じく金でも持人の心によつて大變な違ひを生じて來るのである。時も亦た金である。昔から寸陰寸璧と言つて、時即ち金といふ考へはあつたものであるが、時に使はれては駄目である。宜しく時を使はねばならぬ。それには、先づ第一に早起きをしなければならぬ。

三 宇宙と我との合致

扱て、人より先立つて眼を覺ましたならば、蒲團の上で寢衣のまゝ、静座一炷香する一炷香といふは唯だ前後の文章から使つた丈だけで、別に線香を焚かないでも可い。兎に角、静座をする。ところが、此頃は静座に色々式が出来て、世間では大分流行し、多くの人が大なり小なり静座を行つて居るが、結構なことである。併し、此の静座と

いふものを單に物質的の利益を得んが爲めに行つて居る向きもあるやうに思はれる。或ひは、不老不死の元氣を得て人間の有ゆる快樂を恣にしうなど、いふ量見で行つて居るものも大分あるかも知れない。静座する結果、自然に身體が壯健にもなるであらうが、そればかりが静座の目的では無い。老耄は思ふに、静座といふことがある以上は、其の一面に動座といふこともあるべき筈である。古い書物を見ても、何うも動座といふことは見當らない。けれども、静座がある以上は動座といつても敢て差支へあるまいと思ふ。人を避けて静かに座る、善いことに違ひないが、半面に於て動座といふことを忘れてはならぬ。古人も、「動中の工夫は静中の工夫に優ること百千倍なり」と申して居られる。それであるから、今日は静座といふよりは、寧ろ、動座と稱した方がよいかも知れない。山寺に隠れて静かに工夫に専念するよりも、此の活社會の眞中で修養工夫する方が効果が遙かに優れて居る。が、誰れに向つてもこれを求めるのは、或ひは多少無理かも知れんから、先づ最初は静座の工夫から追々と動座に

到るが順序であらう。併し、更に、深い所に進むと、静座でも動座でも何れでもよろしい。即ち、「一切萬境に對して心を動かさざる之れを座と謂ふ」で、四圍の境遇に我心を動かさざるに至りて座るといふ目的が達せられたものである。不平、不満、煩悶、懊惱ある間は座るは座つても眞の座でない。

暫くちつと座つて居ると、自己といふものが現はれ來つて、何等かの響、何等かの光を發して來る。平生は此の響きは耳に入らぬ。此の光は眼に見えぬ。けれども、其れが本來なんである。恰も太陽は常に赫々の光を放つて居るけれども、手を以て眼を覆へば、其光を見ることが出來ない。梁塵も爲めに飛ぶといふ音楽も、耳を覆へば其の妙音を聞くことが出來ない。ところが、静座すると、今迄は外界の影響を受けて居たのから超越して、今度は四圍の現象は恰も我が心の影法師のやうに考へられて來る我れだの彼れだのといふ差別が無くなり、更に進んで宇宙と我とは一緒になつてしまふ。神や佛と同じものが我が心に現はれて來るから、名前は權兵衛でも八太郎でも構

はない。實に偉いものが我が肚裡に在るのである。こゝが他の宗の説くところと我が禪宗の説くところと違ふ點であるが、我心の奥を見るには、敢て専門に公案などを考へるまでもなく、靜かに座するに従つて、今までは遠くに之を求めて居たものが、直ぐ我が足許に在つたことに氣附くであらう。其時は、恰も、天地創造の時代のやうに何か知らんバツと明るくなつた氣がするであらうと思ふ。そこで、老衲は、平生、早起未だ衣を更へざるに静座一炷香せよと云ふことを「座右の銘」の第一條として居る譯けである。

四 敬虔熱烈なる信仰心

次は、「既に衣帯を着けなば必ず神佛を禮せよ。」老衲共は厭でも應でも之れをやるのが習慣になつて居るが、諸君は何うである。着物を着て、仕事に手を下さぬ先きに、自分の親に對してお早うと挨拶する如く、自分の祖先に向ひ、更に遡つて神佛に對し

て感謝の念を捧げる人が何れ位あるであらう。老衲は日露戦争の當時、從軍して彼方此方、慰問して歩いたが、兵士の中には朝起きると敬虔なる態度で太陽を拜んで居る者を見たが、若い將校などは之れを見て、太陽も地球も同じものである、何んだつて太陽などを拜むかと云つたやうな態度であつたが、さう云ふ淺薄な眼を以て見ては不可ない。此の眞面目なる精神があればこそ、敵國に比べて、物質的に於て數字的に於て比較にならぬほどであるにも拘はらず、彼のやうな戰捷を見るに至つたのである。素より此の他にも色々原因はあつたであらうが、吾々日本人には斯る美なる感情があるのである。此の美なる感情があるから、太陽を拜むばかりでなく、或ひは山にも己が心を捧げる。之れを一知半解の相對的知識で冷笑し去るといふのは甚だ不可ない。斯くの如く敬虔熱烈なる信仰心があるからこそ死んだ山をも活かさずには置かないのである。此の精神の力を看過してはならぬ。老衲が亞米利加へ渡る船中で嬉しいと思つたことは、向ふに行く日本の勞働者……風態は餘り感心しなかつたが、毎日、朝起きる

と太陽を拜む。老衲は之れを見て大變嬉しいと思つた。少し學問でも有る日本人は、其れを見て、馬鹿な眞似をして居る。西洋人に見られたら耻かしいぢやないかなど、いふが、假令、西洋人が笑はうが、天竺人が笑はうが、笑ふ者には勝手に笑はして置くがよい。外形の問題ではない、精神上の問題である。或ひは、其の形に於ては彼等ともつと文明的にならねばならぬかも知れんが、精神の置所は此所になくしてはならぬ。先帝陛下の御製にも

目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけり

と仰せられてあるが、實に、百千萬の教訓にも優つて居るのである。我々は常に此心を助長し、向上せしめて行かなくてはならぬ。國の成立の原因は此心である。此心の盛んなる國は榮え、然らざる國は衰へるのである。遠くに例を引かなくとも、現在、最も、我れと近い支那及び露西亞は何うであるか皇室に對して美しい感情を有つて居る日本人としては、彼の狀態は到底解し得られぬ

どころがある。なまなか一寸した理窟を覚え、徹底しない何かにかぶれた……芋か大根を天麩羅にでも爲たやうな妙な理窟を此間に捏ね上げるのが間違つて居る。家庭教育や學校教育の事に膺る人は、形や言葉の末に拘泥しては不可ない。宜しく身を以て人に示さねばならぬ一家の長たる主人に此の心掛けが有つたならば、別に八釜しく理窟を言ないでも可い。子弟は自然神佛を禮するやうになるのである。祖先教……アンセスターなどは野蠻時代の遺風であつて、今日の開けた世の中にそんな事を言ふのは馬鹿だぞ貶す人もあるかも知らんが、それは大に間違つて居る。親を大事にする心ある者ならば、期せずして祖先を大切にす。此心は即ち上皇祖宗に事へまつる所以であつて、親を敬ひ祖先を重んずる精神のない者は、皇祖宗を崇敬する所以を辨へぬものである。祖先を拜むなどは實に開けない事だと笑ふが如きは、實に憐れむ可き淺見である。或ひは、また、木像や何んかを拜むのは愚の至りだと冷笑するかも知れんが、木を拜むのではない。また、金を拜むでもない。金をも、土をも、木をも、

乃至、糞土をも光明赫々たるものに純化し靈化するのである。是れ、即ち、精神の力、換言すれば信仰の力である。單に木を見、土を見、金を金に見、水を水と見るのは、所謂、物質的學者の見解である。木をも土をも金をも水をも神化し佛化し靈化するは信仰心である。此所を見なければならぬ。單に物を物と見る丈で、それ以上何等感覺なきは眞の信仰に至つた者ではないと思ふ。

我々が、今日、斯くの如く、世の中に立つて行けるのは、親のお蔭、また、祖先の賜で、社會的に考へると、偏に先人努力の賜に他ならぬ。我々は此の賜を最善の力を竭してより善きものと爲して子孫に傳へるのが、即ち、祖先の恩に報ゆる所以であらうと思ふ。祖先を尊敬するのは、元來、人間の至情である。彼の西行法師が、伊勢の大廟に詣で、

何ごのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ

と其の感情を詠つたのは至極尤ものこと、言はねばならぬ。

五 我は社會の一分子

次は「眠は時を違へざれ食は飽くに至らざれ。」老衲は雲の食客になつたり水の食客になつたりする人間であつて、常に他人の世話にばかりなつて居るので、これは思ふ通りに出来ないこともあるが、併し、其の心の形は失はぬやうにしたいと思つて居るのである。凡そ、衛生を重んずる人ならば、必ず、大なり小なり此事を守つて居るに違ひない。我々の身體は我々の有であるが、一面から云ふと、我々の有であつて我々の有でない。即ち、我々といふものは社會の一員である。詰り我々の身體は我々の私有物であるが、之を社會的に云へば共有物である。それであるから、我々の身體といふもの、關係は獨り我々一個に止まらぬ。近い話が、何か流行病にでも罹つた時である其の病毒が一村一市街どころでない、遠く外國にまで及ぶことがある。かう考へて見ると、我が有であつて決して我が有では無いのである。一面は私有物に見えるが、國

民の一人、社會の一分子として見るときは共有物であるから、我が身體は何うしても大切にせなければならぬ。斯ういふことは、此頃、世間で、稍や徹底的に考へられて來た傾向がある。老衲は結構だと思ふ。衛生思想の進んだ人ならば、道德上に於ても、また、不道德なことは爲ぬ人であらう。而して、また、衛生を重んじ、道德を考へる人に無宗教な人はあるまい。道德と宗教とは隣合つて居るものである。道德はやらぬが宗教は信するといふことはない筈である。倫理道德を缺いだ信仰心は動もすれば迷信に陥る。迷信は排除しなければならぬ。一夜のうちに成金になり度いと一心に祈るなどは非倫理的であつて、似而非信仰である。衛生を重んじ、道德を守つて活動を續けていつたならば、自然に金持になり得るのである。而して、之れが順當なる金持になる手段である。

六 千萬人と雖も吾れ行かむ

「客に接するとき獨處るが如く、獨處るとき客に接するが如くせよ。」これも、なかなか、實行は六ヶ敷い。動もすると、これが二つに分れたがつて困る。老衲供、書生時代雲水時代には思うて居ることも、人前に出では十分言へなかつたりしたものだが、それは飾る心があるからで、うまく言ひたいの何んのと心に飾るところがあると、思ふ通りに行かぬものである。或ひは、また、自分より地位の高い人の前に出ると、何んだか恥しいやうな、恐しいやうな氣がして萎縮してしまふことがある。畏れ慎むといふことは必要ではあるが、徒らに氣後れを取るやうではいけない。何うも之れは知識ばかりでは駄目らしい。或ひは、また、化物だの幽霊だのと云ふことは、愚夫愚婦の言ふことだと知つては居りながら、彼處の山里に昨日死んだ者の遺骸を埋めてあるから、彼處まで行つて、何か其の證據に石でも拾つて來いとか、供へてある花を一つ持つて來いとか言はれると、幽霊などいふ馬鹿氣なもの、無いことは百も承知して居るけれども、實際の場合に當ると變な氣が起つて、何んだか有りさうにも思はれる。殊

に、それが、親族とか故舊とか親子とか夫婦とかいふものになると、一層、變な氣がする。偕老同穴を契つた夫婦でありながら、死別すると夜も寢附かれない人もある。恐しい〜と思ふて居ると、疑心暗鬼を生じて、いろ〜な妄想が湧いて來る。いやまた〜、話が外れて、大分、餘計なことを言つた。兎に角、千萬人と雖も我れ行かん底の勇氣が必要であつて、獨り處るときも客に接して居るときに如く、客に接して居るときも獨り處るときに如く、常に心を取り亂さぬやうに心掛けて居らねばならぬ。

七 尋常苟も言はず

「尋常苟も言はずはざれ、言はず必す行へ。」老衲共は幸か不幸か、多く人の御座る前へ出て話をする機會が多いが、此頃、切に感じて來たのは、人前に出て言ふは可いが、果して、己れ自身が其れを行つて居るか否かと願ふと、責任を感じて滅多なことは言へない。假令、言うたことが皆な行へなくとも、半分でも四半分でも、是非、實行し

なければならぬと云ふ氣がする。大聖孔夫子は、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲するところに従つて則を越えずと申されたが、修養の極致は此處に到らねばならぬと思ふのである。

八 機に臨みて譲る勿れ

「機に臨みて譲るなかれ、事に當つて再思せよ。」機とは心の働きを言ふのである。心機一發するとか、一轉するとか云ふことは、豫め、待ち設けられない。そこで、機に臨みては……即ち天より與へられた機會が到來したならば、一步も容赦はしない。恰も、龍の風雲に乗するが如く、疾風迅雷でやらねばならぬ。愚圖くして居ると、一生涯、機會を逃がしてしまふことになる。併し、之れは投機的の心とは違つて居る。千思萬考、一たび機會が到來したならば、其の疾きこと風の如くに其の機會を捉へる。こゝは以心傳心であつて、説明の出來ないところであるが、或ひは、諸君は常に能く

之れを實行して御座るかも知れん。事に當りて再思せよ、小事は忽に附し勝なものであるが、何事も能く考へることが必要であらうと思ふ。故人も、日に三たび吾身を省ると申されたが、進んで何事かを實行するのにも、また、退いて守るのにも、能く物事を熟慮するといふことが大切である。輕々に事を爲せば、失策を招き、後悔先きに立たぬことになるのである。

九 精神的に生存を續けよ

「妄りに過去を思ふ勿れ、遠く將來を慮れ。」何うも、人間といふものは、過ぎ來しかたを兎や角と思ひ悩む。さうして、其間に、いろくな妄想が湧いて來て、役にも立たぬことに時間を潰すといふことが有り勝である。妄想といふ奴は甚だ不可ない奴である。彼の頼山陽をして、相模太郎膽斗の如しと謳はしめた。日本史上の偉人物、北條時宗の如きも、生來、極く弱い人であつた。殊に、雷鳴には一と堪りもなく辟易

するといふ人であつた。そこで、時宗が精神上の師と仰いだのが、我が圓覺寺の開山佛光國師であつた。國師から、莫煩惱、または、莫妄想ともしてあるが、此の垂誠に依つて修養に修養を積み、遂ひに、彼のやうな偉い人物になつたのである。妄想があるも勇氣が消えてしまふ。そこで、妄りに過去を思はず、遠く將來を慮ると妄りに過去を思はなくなくなる。一體、われ／＼人間は、如何に物質的に豊富な生活を送ると雖も、其の死するや一切が水の泡の如くに消え去りて、何等此の世に残らぬやうでは、まことに生甲斐のない生涯と言はねばならぬ。たとひ、此の世に物質的に存在しなくとも、精神的に生存を續けて行くやうに心掛く可きものである、歴史上に残つて居る人物は、社會的に生きて居るのである。釋迦でも、孔子でも、耶穌でも、肉體的には死んでしまつたが、精神には未だ生き／＼して此世に赫々たる光明を放つて居るのである。

十 丈夫の氣を負ひ小兒の心を懐け

「丈夫の氣を負ひ、小兒の心を懐け。」男子と女子とは、一見、區別が明瞭であるが涅槃經には、覺性を有する者は女でも男だ」とある。實に、痛切なことを申したものである。若し、覺性無きに於ては、堂々たる六尺の男子と雖も、一般、女子と異ならぬのである。

男子たる以上、先づ、丈夫の氣を有たなくてはならぬ。山岡鐵舟居士には、老衲が雲水時代や書生時代に色々世話になつたが、維新當時、排佛毀釋の聲が喧しかつた際に鐵舟居士は何んと言はれたか。天下萬人悉く排佛に傾くも佛法は吾一人で之れをやると叫んだ。是れ、丈夫の心である。恰も、戰場に出て敵に對するやうな趣き、是れ即ち丈夫の氣を負ふものである。他人の厭がることは、自分が進んで引き受けてやる此の義烈心、此の義俠心が日本人たるところで、而して日本が今日に發展し來つた所

以なのである。義侠心、即ち、これが丈夫の心なのである。然れども、そればかりでも不可ない。其れに加へるに小兒の心を以てする。赤ん坊の心と云ふものは、實に麗しいもので、何んとも言ひやうがない。母の懷に抱かれながら、小さな木の葉見たやうな手を出してニコ／＼と笑むさまは、神か佛の現はれである。小兒は纖弱いものであるが、一面非常な力を有つて居る。如何なる兇器を携へた強盗でも、之れを殺す氣にはなれまい。如何な學者でも之れに理窟を説けはしない。此所に一種幽玄微妙の所がある。幾ら年取つても此の天真爛漫たる心を失ひたくない。南洲翁は人を相手とせず天を相手とせよと申されたが、至言ぢやと思ふ。天は怒らない。拳を固めて見せても天は決して嫌な顔をしなない。人間も何うかして然ういふ大きな麗はしい心を有りたいものである。

十一 何事も思ひ煩ふ勿れ

「寢に就くには棺を蓋ふが如くせよ、褥を離るゝには屣を脱するが如くせよ。」寢に就いたならば、何事も思ひ煩ふことなく眠りに落ちる。寢に就いて色々な妄想を畫いて心を掻き亂しては勿ち眠りが妨げられ、遂ひには神經衰弱になる。サア眠られんとなつて氣を病むと、其れが自己暗示見たやうな具合になり、神經は益々どぎつて眼が牙え、一寸した音にもビツクリしたりして却々眠られない。老衲の所には學校の試験に餘り勉強を過して神經衰弱になつたから參禪でもして見たいと書生が能くやつて來るが眠られんなら眠らぬとしたり何うだ。人間は一週間位寢ないでも死にはしない。何んなら死んでも宜いが……自分は眠つてやるまいとしたら何うだ。眠り度い／＼と焦せるから却つて駄目だ。一つ心機を一轉して、自分は眠るまいぞ……是れで睡魔を追ひやつたら宜からう。極端なことを云ふやうだが、人に依つては、老衲はそんなことも言ふのである。褥を離るゝには屣を脱する如くせよ。之れは別に言ふまでもなく判り切つたことで、褥の中で愚圖々々やつてちや不可ない、思ひ切つて跳ね起きる。辛から

うが其れは瞬間である。

先づ、老衲が平生「座右の銘」として、實行に心がけて居る九ヶ條ばかりの事項に就いて、ざつと御話をした。だら／＼長くなつて、或ひは砂を噛むやうであつたかも知れぬが、凡そ、寸金を獲んと欲せば、砂や砂利と雖も捨て難い。諸君が、此の砂や砂利の中から寸金を得て下されたならば、寔に老衲は喜ぶところである。

貧富何かあらん

一 満天富の蒸發氣

古人が「富貴は人の欲するところ、貧賤は人の欲せざるところ」と曰つて居る通り富の力といふものは、俗界から云へば實に大したもの、富あるが爲めに凡ての事物

が發達して行く。一束に云へば、有らゆる人生の榮華は富の一つより生み出すと云つても、敢て過當とは思はれない。併し、これは形而卜の話である。ところで世人が最も大切なものと思つて居る此の富も、道義的眼光を以て看破つてしまへば、孔子が曰はれたやうに、「不義にして富み且つ貴きは我れに於て浮べる雲の如し」で、一段、飛び抜けたところから見ると、是れくらゐ無趣味なものはないと云つても宜しい。今日の有様は、殆んど、富の爲めに、人間が朝から晩までザク／＼として居るやうなもので、到るところ、大空へ一種の蒸氣が立つて、賑はしく見えるのである。何んの蒸氣が浮き上つて居るか云へば、即ち富の蒸發氣が上つて居るのである。其の蒸發氣が盛んに立つて居る國は、強くて、大きくて、開化けて居ると云ふのである。其の通り富の必要を感じる今日ではあるが、併し、昔から、彌太も兵太も、皆な、富と云ふことには眼が眩んで居るので、堂々たる君子人ですら、富の爲めには道義を顧みない。従つて、富を作るには、其の手段の何たるを問はずと云ふやうな有様で、自らを欺き、

人を陥れ、權謀術數至らざるなく、また、それが爲めに、心中、大煩悶を來すことになる。實に、富を得て快樂すべき人間が、却つて富の爲めに其の頭腦を惱まされ、自亡自失するにいたる。是等のことは、事實を擧げないでも、諸士が能く見聞せらるることであらう。

二 富は恰も利刀の如し

老衲が思ふには、富と云ふものは、恰も、利刀の如しと云つてよい。使用者が良かつたら、其の利刀の富はイヨ／＼利に用ゐられ、鋭きものはマス／＼鋭く社會を利益するのであるが、若し、使用者が悪かつたならば、これが爲めに自分を壊り、他を傷け道義を壊り、人道を破つて、大變な害毒を社會に流すと云ふ様なことになつて來る。米國の如きも、富が本位になつて、富といふことには非常に重きを置いて居るやうであるが、其の爲め、動もすれば、堂々たる政事家も、學者も、金力の爲めに使はれる

弊がある。ルーズベルト氏のやうな豪傑の人でもなければ富の爲めにコキ使はれぬといふことは六か敷い。富が重んぜらるゝ結果、動もすれば、國是を忘れるといふ大不祥事を起すやうになるのぢや。彼の亞米利加のモンロウ的國是は、決して、他の人道を犯さず、他の寸尺の領土も侵さないといふ主義の政綱である。ところが、富の必要上、それが、他の領土を侵略して、自國に出来る品物を其の新領土に賣捌かうとする。夫れ位の富の力が重んぜられて居る。ルーズベルト氏の如く、「不正の富は仇敵の如し」と云つて、ドシ／＼攻撃して行くものは、滅多に見ることが出来ない。が、先年の鐘詰事件や海軍事件の如く、不正不義の徒を懲らしめたる如き、また最近に於ける物品買占省令の如きは、實に痛快なやり方であつた。いや然かあらねばならぬことぢや。富豪だけに何んな大きい事も出来るから、米の一萬二萬位は全財産の小部分でも買ひ占めは出來やう。従つて、巨萬の利を貪ることも出來やうが、これを以て貧窮に泣ける下民を苦しめると云ふことは、大罪許し難きことである。利を得るにも道を

踏み外れてはならぬ。如何に巨萬の富があつても、道義心に缺けて居るならば、精神的の貧者として、實に憐れむべき人である。已れが進んで欲求した富に縛せられたりやがては縛せらるべき富を得んが爲めに、人道を無視し、道義を顧みないといふに至ては、富の害や實に甚しと云はねばならぬ。故に「物質的に貧なるも精神的に富め」と云ふことは、實に道者の常套語として輕々に看過すべきものでない。

三 道は貧道より尊きは無し

貧といふことを形而上から眺めて見ると、これにも種々の意味がある。貧といふものは大變誤解が出来易い。貧乏これも天命だ因縁だといつて、朝から晩まで寝轉んで居て。貧に安んじて居るといふのは論外で、決して然ういふ意味ではない。爲すこと無くして貨に安んじて居るのは、それは賤しむ可き貧である。富に濁貧があると同時に、貧にも濁貧があると思ふ。此の貧といふことを形而上に起つて眺めて見ると無量

の味があるのである。夫れ故に、我が宗旨では、「道は貧道より尊きはなし」と云ふのぢや。畢竟、貧といふことは、有らゆる罪惡、妄想、我意、我慢、我執で、即ちセルフィッシュネスと云ふものから起るものは、皆な夫れである。是等が皆な失くなつて貧になつてしまふ。即ち我が胸中がスッキリ貧乏になつて仕舞ふのである。例へば一つの學問とか見識とか、若しくは一種の悟りとか——夫れが迷ひよりも勝れて居るにしても——夫等のものが胸中に蟠つて居て、其の爲めに自己の自由を縛られて居る。其の繫縛する物をスツカリ捨て、終つて、貧乏になつてしまふ。さう云ふところに貧の味があるのぢや。

然し、是れは、形而上ばかりの話ではない。世間でも道義に重きを置いて居る人はチャント貧道より尊きは無いことをやつて居る。例へば、孔子が賞美して「賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在りて人は其の憂ひに堪へず、回や其樂みを改めず、賢なるかな回や」といはれた顔回の如きは其人である。若し、是れが、濁貧に

安ずる乞食根性のものならば、鑑錢三文の價値もないのである。貧は空しき義で、虚心平氣とか洒々落々とか、光風霽月とか、形容詞は澤山あるが、諸君は日々活動して居られる其の中に胸中閑日月ありで、夫れあるが爲めに能く活動して居ることが出来るのである。胸中閑日月の無い人は、何事をするにもビク／＼して居るが、夫れを有して居る人は大活動をして居るのである。

四 光風霽月を樂め

昔から、「大に働くものは大に休む」といふ語がある。然り、大に働く人は大に休息をする。然し、休息と云つても、大酒を飲んだり、花柳の巷に入り浸つたりして、不道德の休息をするのではない。世間には、往々にして、斯る醜しい休息を以て、勞を慰するものと考へて居るものがあるやうであるが、此輩は眞の休息を知らないものである。云ふところの閑日月の境地に自分を處かねばならぬ。天空海澗的の氣分を養ひ

常に平和を自己方寸の中に貯へるやうにせなければならぬ。如何に巨萬の富があつても、其の心がなければ常に飢えて居るものと云はねばならぬ。古人が、「昨年の貧は雖もつて地なく、今年の貧は雖もなく地もなし」と云つて居るが、其處まで行くのである。眞の赤裸々は此處に到つて現はれて来る。バイブルには、「貧しきものは幸ひなり」と云つてある。然ういふ意味の貧道を辿らねばならぬ。斯くして、吾人は、家に一俵の貯へなく、懷中を求めて一錢だに得ない時に於ても猶ほ光風霽月に樂んで、人生無限の榮福を得ることが出来るのである。然し、容易く聞いてはならぬ。其の榮福を掴み出す自己を如何に修む可きか。我が無限の榮福を藏する寶庫は、如何なる鍵によつて開く可きか。これが問題である。諸君は、これを解決すべく、如何に工夫すべきであるか。

汝が心を制せよ

一 心は毒蛇悪獸の如し

大聖釋迦牟尼世尊、堅説横説、四十九年間三百六十餘會の應病與藥を爲され、度す可き處の者は己に度し訖つて、娑羅雙樹の間に於て、將に涅槃に入り給はんとする時、末後末世の我々の爲めに説かれたのが佛遺教經である。今其の一節を拜讀致しますと、

「此の五根は心を其の主と爲す、是故に汝等當に好く心を制すべし、心の畏るべきこと毒蛇、惡獸、怨賊よりも甚し、大火の越逸なるも、未だ喻とするに足らず。」
 と、仰せられてある。此五根とは世間に云ふ五官のことで、眼耳鼻舌身の五つを謂ふ根とは木の根と讀む、此五根の爲めに吾々は常に迷つて、財色食名睡といふやうな五欲に愛着しては、煩惱生死の迷界に彷徨うて居るのである、我が佛敎の見地から云へば、欲と云ふても決して一切の欲を制せよとは申さぬ。正義正道の欲、即ち分に應じ

たる潔白なる欲は是非共採らねばならぬ、斯かる欲があればこそ、吾々は物質上にも精神上にも安心が出来るのである。然るに吾人は從晝至夜、私欲から割り出されたる自分の個性によりて貪欲を生じ五欲に轉倒せられ惡業を造り自分と自分に苦しみを受けて居るが、心も腐敗すれば身も枯れ朽ち果て實に淺ましいものである。昔から意馬心猿と云つてあるが其の狂へる猿、荒れたる馬の如き心も吾が心、其の亂心を制御するも亦吾が心である、して見れば此の心が迷の本となり、又悟りの本ともなるのである。故に心を其の主とせずと仰せられてある、主此の亂心狂意を制伏するには、一切の對境を忘絶して自己如何にと工夫して見なければならぬ。此の自性を徹見する修養は坐禪より外に捷徑はないのである、故に坐禪は却々六ヶ敷ものであるが、又思つて止まざる精神さへあれば實に容易なのである。

二 瑞嚴和尚の自警

汝が心を制せよ

往古の禪僧に瑞巖と云ふ偉い坊さんがあつた。常に方丈に坐り乍ら一人問答をして居られた。それはどうかと云ふに「主人公——主人公」と自ら喚び、暫らくして「諾」ハイと答へる。又「惺々着——惺々着」と喚ぶ、即ち眠つて居りやせんかといふのである。又「諾」ハイ起きて居ます。又曰く「他の瞞を受くる勿れ」ぼんやりして居て笑はれまいぞと、一人問答によつて自警せられたのである。吾々が参究する上にも、是れを取つて味はつて見ると、寔に親切なお示しが解る。

實に此の心はコロコロと飛び出したがる、一度主人公を吾が物にすれば、機に觸れ物に應じて隨處に主となる事が出来るのである、故に「汝等當に心を制すべし」と仰せられたのである。若し此主人公を失却すれば如何なる災難を醸す事があるやも知れぬのである。眼にあつては見と云ひ、耳にあつては聞と云ひ、鼻にあつては香と云ひ舌にあつては味と云ひ身にあつては觸と云ふ。此五根が五境に貪戀愛着して終に我が物に非ざる區域以外に手が出るものである、さては佛は毒獸怨賊よりも甚しと仰せ

られてあるが、世間の言葉に「地震雷、火事、親爺」と云ふてあるが夫れよりも尙ほ恐ろしい。古歌に

心こそ心迷はす心なれ心の駒に手綱ゆるすな

とある。然らば此心を如何に收得するか、八萬四千の病と云ひ、煩惱と云ふ。之れを根本的に療治するには、宗教的力用に據るより外に道がない。誰人が毒蛇惡獸怨賊大火を恐怖せぬものがありませう、誰か家庭不和の運命に泣き、何人か個性の充實を叫び、將又救世主となりて、人道鼓吹に信念を注がざるものがありませう、諸神痛切に感じて、絶對無限宇宙の大道に通達して、永遠的力ある事業、力ある根底を造り、古來の因襲を打破して、汚泥にあつて泥汚に染まざる主人公を見得し、日々是好日と天與の職分を全うすべきではないか。

三 心は主なり慾は従なり

吾々人間は欲の容れ物であると云はれて居るが、欲とは元來如何なるものであらうか、欲と云へば何うも悪い事ばかりのやうに聞へるが、強ちそれに限つた譯でもあるまい。佛も「我欲あるが故に道を成することを得たり」と仰せられてある。して見れば欲には善惡の二つがある。ところで其等の欲は吾々の胸中に同居して居る別々の存在であろうか、否さうではない、元々同一のものが別々の方向に表はれる迄である。例せば茲に一本の名刀ありとせんか、善人之れを用ゆれば活人劍となり悪人之れを用ゆれば殺人刀となる、然かし其刀たるに於ては少しも異りなきが如く、吾々本心は善でも惡でもない。故に之れを善用する事が肝心である。さて慾が表はれて來る種類は種々様々であるが、其根本となるものは財色食名眠の五慾である。其中でも食色とが常に最も猛烈で種々なる新聞の種も多くは此の二つから出るやうである。古來、衣食足つて禮節を知ると謂ふ。が窮すれば亂すで幾ら働いても病氣災難が次から次へと起つて來る、妻子眷屬は饑寒に泣く、悪い事とは知りながら終ひ善からぬ事を働くや

うになるのは小人の常、この心を制するのが佛敎の誠めである。

次に異性に對する慾、元來異性は相愛するもので、之れに依つて萬物は生成する、實に造化の妙と云はねばならぬ。然かし道に契はぬ愛は却つて人を害する。諺にも「罪惡の蔭には女あり」と云はれて居るが、女から云へば「罪惡の蔭には男あり」である。兎に角吾々が大いに制すべき事は色慾である、又これを制する事が容易でない然らば何うしたならば是れを制する事が出來やうか。

人あり姪の止まざる事を患ひて、自ら陰を除かんと欲す、佛之れに謂つて曰く、若其陰を斷たんより心を斷つに如かず、心は主、主若し止めば從者都て息む、邪心止まざれば陰を斷つも何の益ぞ。

と四十二章經に出て居る。或人が姪慾猛烈常に抑へんとして抑ゆる事が出來ぬ、そこで考ふるに、男子たる表徴の陰根、是れさへ無かつたならば、然り寧ろ此一物を打ち切つて了ふたら、決して再び妄想が起る道理は無からうと、第三者から見れば何で

もないやうであるが、當人が是れ迄の決心を爲すに至れる苦心は察するに餘りある事である。佛之れを見て、それは間違つて居る、元來身と心とは、之れを譬へて見れば心は役人見たやうなもので、身は其家來である。若し主従二人道を歩いて居るとすれば、主人が止まれば其従者は必ず止まるに定つて居る、故に其主たる慾心さへ断てば従者たる陰根は自ら之に従ふのである。若し其慾心を断たずして、唯陰根だけ断つても、主人たる慾心は容易に之れを承知するものではない、必ずや他の方法を以て更に他の間違つた事をやらぬとも限らぬ。故に其陰根を断たんよりも寧ろ抑へんとして抑へ切れない其心を断つて了へと誠められた。今日は生理生殖と云ふ問題が八ヶ間敷い時代である。慾心を全く断つて了ふ事は什んなものであるうか、それは又別途の問題で茲に用はない。兎に角、幼兒のやうに其害を知らずして無暗矢鱈に甘いものを食へる人が無いとも限らぬ、之れは大いに注意を要する事である。

四 菩提の靈光

之れを要するに心は主で身は従である。故に佛教では先づ最初に心を修めてかゝれど教ゆる。心を修むるには種々方法もあるが、神や佛を順ほに信する、それも結構である。然し智識に訴へて批判しやうとするもので、神や佛を順に信する事が出来ぬ者も出て来る。そこで聖道門では之れを疑ひ之れを考へさすることゝして居る。畢竟智慧の光を以て妄想煩惱の迷を暗に照破するのである。乍併、迷の暗を取除いて別に智慧の光を持つて来るのではない。直指人心見性成佛で、此の迷へる心が直ちに悟の大佛心である。吾々の心の中の迷と悟と二つのものが勝つか負るか角力を取つて土俵の外に投げ出すやうなものではない、迷の心を轉ずれば、それが直ちに悟である。之れを煩惱即菩提と云ふ。

盜人を捉へて見れば吾子なり

汝も心を制せよ

である。我を害せんとする、我物を掠めんとする。其煩惱妄想の本體本性は如何なるものであるかと思へば、之れ却つて我を助け我を救ひ、我れに忠實なる菩提の靈光であつたのである。要するに邪しな心、正しからざる心を、其儘正しく真直ぐになほす迄である。言ふ事は何でもないが、之れを實行するには多年の修養を要するのである。

五 生れぬ先の面魂

さて以上の話で、迷と悟、煩惱と菩提それらの二つのものが初めからあるのではないと云ふ事は略ぼ分つたであろうが、今一例を擧げて見れば昔六祖大師が大度嶺で不思議不思議の時那箇か是れ明上座父母未生前本来の面目と示された一句に依つて、明上座は豁然として大悟したと云ふ事である。白隠禪師は生れぬ先の面魂を此處に持つて來いと云はれた。生れぬ先の面魂、何處に善があるか

何處に悪があるか、換言すれば吾々は常に相對差別の境に頭出頭没して迷とか悟りとか是とか非とか頭を二つに分けて居るから、惜しい欲しい憎い可愛い可憐の煩惱妄想が競ひ起るのである。一度絶對無差別の境に歸入せんか、自他平等一如となつて我他彼此の邪見は立どころに無くなつて仕舞ふ。之れは禪宗で云ふ所であるが、之れを他宗で云へば、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と一心に稱へる時、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と通身これに成り切つた時、其處に何の煩惱があるか妄想があるか要するに聖道門と云ひ淨土門と云ふも玄關の違ひ丈で、奥に這入つて見れば皆同じ座敷に通るのである、唯淨土門は情を以て導くから平易に聞え、聖道門は智を以て導くから六づかしく聞ゆるまでである。淨土門で云へば、

唱ふれば我も佛もなかりけり南無阿彌陀佛

と云ふ迄立到らねばならぬ、禪宗で云へば通心徹心自他一如になり切らねばならぬ。幾ら理窟で頭惱は無いぞと抑へ付けて居ても下からと頭を持上げて來る、石

汝が心を制せよ

で抑へてをる間はよいが、少し隙きを見出すと忽ち雑草は生繁るものである。故に大徹大悟を以て根こそぎ引抜かねばならぬ。

田の草を取りて踏込む肥料かな

今迄害を爲せし田の草も根こそぎ引抜いて踏込めば却つて之れが肥料となる、此處に至るのが眞の修養である。禪の妙處である。

一般世間の人は五慾七情の外に心なく、而かも此五慾七情は別々の存在であると考へて居るが、元來これは心の影で忽ち現じ忽ち消ゆる。今彼奴は憎い奴だ憎い奴だぞブリ／＼して居る處へ、可愛ものでも突然やつて来れば忽ちニコ／＼して、先の怒は何處かへ無くなつて了ふ。五慾七情は小兒の喧嘩の如く、誠にたわいないなものである、故に吾々は心の本體を徹見して迷の煩惱を轉じて、直ちに悟の菩提となすの心掛を暫らくも忘れてはならぬ。

男女の闘争

一 物騒な世の中

支那が何うだとか、露西亞が何うだとか、世の中が昨今大分物騒に成つて来た。これは政治上の問題であるが、そんな變化が政治上にあれば、夫れが自づとまた道徳上にも影響して来て、人心に動搖を與へるやうになるものぢや、女のうちなぞにも、定めし斯る世界の大勢に動かされて、心情に動搖を來して居るものがあることだらうと思ふ、殊に今の新しい女と稱せらるゝ連中は、世界の大勢が自分に味方するやうに動いて來でもしたかの如く考へて居るかも知れぬ、これは決して政治家たり、教育家たり、宗教家たるものの輕々に看過し去るべき狀勢では無い。儒教道徳は、素と絶對服従の道徳である。君々たらざるも臣々たるべし、父々たらざるも子々たるべし、

夫々たらざるも妻々たるべし、男々たらざるも女々たるべしと云ふのが、是れ支那の儒教道徳で、頼らしむべし知らしむべからずなぞと、儒教は教へて居るのであるが、然し昨今の如く、世界の太勢が個人の個性を重んずるやうになつて來ては、父々たらずして子に子たれよと強ひ、夫々たらずして妻に妻たれよと強ひ、男男たらずして女に女たれよと強ひ、如何に絶對服従を力説して試たからとて、それは言ふべくして、到底行はれる可きもので無い、現に、絶對服従教の本家本元たる支那に於てすら、それが行はれぬやうになつて居るではないか。

二 推移と破壊との別

君子は物に凝滞せずして世と共に推移すとは、古くから云はれてある語であるが、世の中も亦、時間と共に推移するものぢや。推移には決して急激なる變動とか、革命とかいふ危険を伴ふものでない。恰も太陽スペクトル色彩が、赤から何時の間にか橙

色に移り、橙色から黄に、黄から緑と漸次に移り變つて紫にまでなるのと同じやうに、世の中も猶ほ且つ何時となく推移して行くのが自然の大勢である、此の自然の推移を無理に抑壓しやうとすれば、却つて意外の悪結果を齎らすに至るもので、自然の推移は人力の又た如何ともする能はざる處ぢや、是に於いてか、政治家たり、教育家たり、宗教家たるものは、常に此の推移の状勢より眼を放たず、常に一步これに魁して、其の推移の状勢を善導するやうに努めねばならぬのである。革命とか壞亂とか云ふものが起つて、人心これ危く、道心これ微なる如き、社會状態を呈するに至るのは、人心の推移を無視し徒らに之れを抑壓せんとするにのみ努め、之を善導するを忘れるの致すところである。危険これより甚だしきは無しぢや。女も昨今の如く追々と其の個性を自覺して來るやうになつた時代に於ては、徒らに男が之れに絶對服従を強ひ個性思想の勃興を抑壓して仕舞はうとしても、夫れは逆も能きるものではない。無理にも之れを決行しやうとすれば、茲に男女の鬭争とも謂ふべきものを生じ、女は

益々男に反抗して無法勝手に舉動ひ、女の道心をして愈々危険に頻せしめ、人心の動搖を來す如き場合をも生ずるに至るのである。總じて争闘は何事に依らず、一方が無理ばかりを働いて、他方に絶對的服従を強ひんとするより起るものぢや。

三 相互に義務がある

如何に個性を尊重するからとて、自分さへ勝手氣儘が能きれば夫れで可いと云ふものではない。女さへ我儘が能きれば、男が如何に苦しんでも構はぬ、と云つたやうな調子では、女だからとて、又た十分に其の個性を發揮し得られぬものぢや。眞正の個性發揮は自分以外の者の個性をも尊重するところにある。歴史を無視し、國體を無視し、民族精神を無視する如き突飛な舉動行爲は「放縱」と之れを稱し得られこそすれ、之れを「個性の發揮」とは謂へぬのである。今日の新しい女たちの運動が、まだ社會を動かすほどの大勢力と成り得ぬのは、たゞ自分一人が我が儘をするのに邪魔となる

ものを取り除けやうとばかりして、女全體の個性を發揚せんが爲めには、自分一人の幸福なぞ何うなつても構はぬ、と思ふほどの犠牲的精神に富んだ眞に新しい女が出現からぢや。それでは女も如何に新らしがつたからとて、天上天下唯我獨尊の域に達し得るまでには、前途猶ほ遠しぢや。佛教道徳は、飽くまでも相互的である。これは「六方禮經」を一度讀めば直ぐ覺り得る事だが、之れからの時勢は、逆ても儒教道徳の如き絶對服従で押し通して行けるもので無い、女を女たらしめんとせば、男は男たらざる可らず、妻を妻たらしめんとせば、夫はまた夫たらざる可らずと云ふ事になる。今日こそ新らしい女の運動も實地に勢力は無けれ、小我を没却して大我の發揮のみを念とし、天上天下唯我獨尊の大識見を以て、世に臨む眞に新しい女の現はれ出づる時代ともなれば、新しい女の運命も必ずや實地の大勢力となり、如何に男が強者の權利を主張して女に絶對服従を強ひても、遂に之れを強ひ得られ無くなるは必然ぢや。此の時に當つても猶ほ男が、絶對服従を無理に強ひんとすれば、茲に男女の闘争を生

じ、その結果、社會制度の破壊となり、風俗の攪亂ともなるのである。

四 三十一文字の喧嘩

これは物の譬だが、昔し或る國に仲の悪い夫婦があつて、朝夕喧嘩の絶間がない。其の隣家に諫度言と云ふ歌人があつて、之れを甚だ氣の毒の事と思ひ、何とかして仲よくさせてやりたいものと、一日のこと夫婦を招き、十二分に御馳走をした上で兩人に向ひ、明日より争ひたき事なれば、之を三十一文字にして云ひ合はるゝが風雅で佳からうと申し勧めた。夫婦のものも其の氣になつて歸り、愈々翌朝定例によつて喧嘩の幕開きとなるや、亭主は女房の容態が氣に喰はぬからとて、

あづき餅のやうなるつらをふくらかし、猶ほもやきもちをやくたいも無き

と三十一文字の一首を詠んだところが、女房は甚だしく腹を立て、味噌摺りながら、斯んな返歌をして、

またしても又あく性を摺り鉢の、嬢が顔まで味噌を付けやがる
また或る日の如きは亭主が

散ればこそいとど櫻はめでたけれ、こちらの嬢奴も早やう死なぬか

と詠めば、女房も敗けぬ氣になつて

ほどゝぎす啼きつる嬢は長命し、あほう親爺の跡にのこれり

なごど詠み返して居つた程だが、一日のこと隣家の歌人より亭主へは「かんにんするが家の福徳」の下の句を興へられ、女房は「まけてさへりや其の身安全」の下の句を興へられ、おのゝ之れに上の句をつけよと申し渡されたので、まづ亭主の方から我がよきに嬢の悪しきは無きものと、かんにんするが家の福徳

と詠んだので、女房これを聞いて横手を打ち

何事も我れをあやまり順ひて、まけてさへりや其の身安全

と返歌し、以來夫婦仲よく睦じくなつたと云ふ比喻がある。これ一場の戲談に過ぎぬ

けれども、男女の鬭争は、互に譲り合つて道徳を相互的のものにして置きさへすれば決して起らぬものぢや。之れからの男は、男男たらざるも女女たるべしと云ふ調子では、迎も女と和合して行けるもので無い。女を女たらしめんとせば、先づ男が男たるの心懸けを持つやうにならなければならぬのぢや、昔しから、親孝行は子孝行より始まると謂つてあるではないか。

十方世界これ全身

一 先づ大に考ふ可し

「無門關」といふ書物に、古徳の詩が載つて居る。それは、「百尺竿頭不動人、雖然得入未爲眞、百尺竿頭須進歩、十方世界是全身」といふのであつて、これは、七言

絶句であるが、禪宗では之れを「偈」或ひは「偈頌」と稱へて、其の風流中に宗旨の眼目を具したものが多し。扱て、起句に、百尺竿頭とある。百尺もある、長い竿の頭即ち、其の絶頂まで登つて、其處に尻を据ゑてしまつた不動の人も、まだくそれで一向役に立たぬ。輕業師が高い竿の先きで自由自在に藝當を演ずる、それ丈けでは未だ名人ではない。白隠和尚の隻手なり、或ひは、趙州和尚の無字なりで、一旦の見處は得たにしたところで、其處に尻打ち据ゑて居たのでは、洒々落々たる眞箇の境涯は得られないのぢや。だから承句に於て「然りと雖も得入未だ眞と爲さず」と云つてある。眞箇に大活現前するには、更に百尺竿頭から一步を進めなければならぬ。故に轉句に、「百尺竿頭須らく歩を進むべし」とあるので、その百尺の竿頭から更に一步を踏み出せば、そこが即ち結句の「十方世界是れ全身」である。東西南北四維上下を十方と謂ふのぢや。扱て、今日、到るところの禪堂には、僧侶なり居士の連中が澤山に修行して御座るが、何んの足らざるところがあつて、斯く一寺に聚まつて骨を折る

のであらう。百姓ならば田畑を耕すがよい。商人ならば算盤を弾くがよい。左官ならば壁を塗るがよい。全體、何を求めて居るのであらう。各自に此事を内省するがよい。心なき人は、餘計なことをする奴ぢや、物好きなことをするものだ。大方、道樂に彼んなことを行ふのぢやらう位に思つて居るのかも知れぬ。淺薄な眼で眺めたら其れに違ひなからう。「斯く一寺に聚まつて何をする」この事は公案を拈提して坐禪する前に先づ、大いに考へて置かねばならぬ問題である。

二 生何ぞ死何ぞ

抑も、哲學といひ、宗教といふ、これ等は何んの爲めに起つたものであらう。如何なる問題の解決を以て其の目的となすものであらう。問題は元より多からうが、最も緊要にして最も切なる問題はと云はゞ、要するに「生何れより來り、死何れに向つて去る。」此の問題の解決といふことに歸着するのである。宇宙觀といふのも、人生觀と

いふのも、煎じ詰めて見れば落處は此處にあるのぢや。人間が自ら萬物の靈長なりといつて威張るが、全體、何處が靈で何處が長か、食ふ丈けか、寝る丈けか、衣る丈けか。但しは、毎日「セカ」と忙しさに奔走して日を送ることが萬物の靈長たる所以であらうか。それならば、雪隠の蛆蟲も、蛆蟲に言はせたならば我れは萬物の靈長なりと云ふかも知れぬ。鳥獸であらうが蟲魚であらうが悉く然うである。彼等と雖も然か言ひ得る資格を有して居るのである。故に、此點のみを以てしては、人間の靈長たる言ひ得る資格を有して居るのである。然らば、人間は、何れの點が萬物の靈長であらうか。或ひは本性があるからだと言ふかも知れぬ。併し乍ら、此の本性を有つて居るのは人間に限つたことでない。禽獸蟲魚、何れも本性はある。「一切衆生如來の智慧徳相を具有すとは、佛の御言葉である。「一寸の蟲にも五分の魂がある」とは俚俗にも云ふことぢや。それならば、人間が萬物の靈長たる所以は何處にあるであらうか。自覺を有する點である。禽獸蟲魚には自覺といふものがない。人々の教育智識によつ

て程度の差異はあるが、人間には幾分なりとも自覺を有つて居る。此の自覺があつてこそ萬物の靈長たり得るのである。禪の出發點は實に此處である。禪を修行うと思ふほどの者は、先づ、何故に禪を參學せねばならぬか、釋迦や達磨の悟處、獨り釋迦、達磨のみでなく、耶蘇、孔子、ソクラテース等が何處から現はれて何處へ落着いたかを一考せねばならぬ。古來、史上で偉人と言はるゝほどの人は、たゞに宗教家道德家ばかりでなく、政治家、實業家、軍人、藝人に至るまで、悉く、此の靈氣に觸れた人であらうと思ふのである。

三 相模太郎の膽力

禪宗の起つたのは我國では源實朝時代で、最も隆盛を極めたのが北條氏の時代であつた。彼の大元十萬の大軍を撃ち退けて、後の史家をして相模太郎膽甕の如しと謳はしめた北條時宗公の名は、天下何人も知らぬものがなからう。公は鎌倉圓覺寺の開

山佛光國師に就て參禪されたので、彼の國家危急存亡の秋に臨み、從容として大事に處して行かれた其の所謂甕の如きの膽は何によつて鍛鍊されたかといふと、「莫妄想」の三字であつた。誠に簡単な言葉であつて、之れが初めて參學の日、佛光國師から授けられた公案である。公は、此の公案を二六時中、眞箇に參究して百鍊千鍛、遂ひに之れを自己掌中の物とされたのであつた。其の結果は何うであつたか。元寇襲來の日公は直ちに國師の許に參せられた。曰はれるには、「弟子即今大事到來せり」と、何うです、斯んな時に中々斯んな態度は取れないものぢや。「弟子即今大事到來せり」といふ言葉は至極簡單であるが、時宗公の精神は既に大元十萬の兵を呑んで居るのぢや。國師曰く、「如何か向前せん」公、聲に應じて大聲一番「喝——ッ」とやられた。如何に其威の猛であつたか、「眞に獅子兒なり、能く獅子吼す」と云つて賞讃せられた。これとて、徒らに怒鳴つて見たところで、何んの威もあるものではない。それ丈けの腹が出来て居なければいかぬ。公は、それ丈けの腹が出来て居たからこそ、あれ丈けの

大事を引き受けて能く國家を泰山の安きに置き得たのである。公に就いて思ひ出すのは、公の父君なる最明寺入道時頼公である。公が禪道に於ける修養については世に知れ傳はつた話もないが、末期の偈を見るに、修業は堂奥に入つたものである。

業鏡高懸七十七年

一槌擊 碎 大道坦然

此偈は公の作ではなく、古人の作であるといふ歴史家もあるやうだが、それが、たとひ、他人の作であつたにしても、それを我が有として臨終に誦せられた以上、敢て、自作他作を問ふの必要はない。まさしく時頼公末期の偈に相違ない。こんな偈を誦して安然死に就かれた時頼公の態度は、なか／＼凡人には出来ぬ藝當さ。

四 公案は一種の閑家具

禪とさへ云へば、世人は直ぐに何か常識はづれの奇抜なことでもするものゝやうに思ひ込んで居る風があるが、所謂似而非禪僧となると自己の無學不才を掩はんが爲め

に何んぞといふと直に胡喝亂棒を行す。世間の人は、また、これを見て、あれが禪である悟りであると思つて居る。道徳上から見ても教育上から見ても、無用有害なごぼかりをして居ながら、それで禪である悟りであると謂つて居る。眞實の眞心から出たものならば、喝するも是である。黙するも是である。彼の不二法門の問答について文珠は滔々懸河の辯を振つたが、維摩居士は唯だ默然たるばかりであつた。語黙の境を超越してしまつた人であつたならば、黙したところで、喝したところで是非は直ちに辨別するであらう。指一本立てたところで、華を拈じて微笑したところで、皆、同じことである。人々が相對的智識の上に立脚して居るから、大小とか、長短とか、高低、善惡、種々の差別が生じて來るのである。スーツと指一本立てたならば、天地は此の指一本に歸してしまふ。といふのも言語の上では其の眞意を失つてしまふ恐れがある。此のところは口では言へない。腹に於て會すべしちや。徳山和尚の

道得三十棒、道不得三十棒

十方世界これ全

も、這般の消息にほかならぬ。此處に至つて何うちや斯うちやと理窟を百萬言並べても間に合ふものでない。所謂「會心眞實行」でなければならぬ。禪宗は、公案によつて修行するといふ方法が最も安全で過ちのない方法である。とは云へ、一旦、之れを得てしまつた上では、公案は矢張り一種の閑家具で、臘月の扇子、陣年の曆日ちや。公案は眞境界に達するまでの道具に過ぎないから、一度此の境界を手に入れたならば、奇麗に忘れてしまはねばならぬ。或る一派では唯だ黙々として坐りさへすれば可いと云ふさうであるが、人間の心は死物でない限り、なか／＼さう思ふ通りになるものでない。無念無想になれど如何ほごすゝめても、茶碗や箸のやうに、置いたら置いたまゝ、重ねたら重ねたまゝと云ふ譯には行かぬ。公案の必要は此處にあるのである。

五 自己の本源

ところで、無念無想とは如何なる境界であるかといふと、物と我と一體になつたところ

ろ即ち、我が明鏡に對した時と同じ有様である。明鏡の前に立つた時は、柳は綠、花は紅である。鏡が花か花が鏡か、こゝが中々六ヶ敷のちや。隻手の音聲ならば隻手の音聲、無字ならば無字になり切つてしまふのである。砂糖は嘗めて見て始めて味ひが分る。砂糖は甘いものちや甘いものちやと聞かされても聞かされた丈けでは決して味ひの分るものでない。必ずや自ら嘗めて見なければ分らぬ。公案の本旨もこゝにある。理窟や議論にあらすして實證である。知識で分るものちやない。宇宙の根源を明らめんが爲めには我れなるもの、本源を悟らねばならぬ。それには、先づ一生何れより來り、死何れに向つて去る。「これを明らめねばならぬ。古人は指頭を拈擧したり、或ひは、また、父母未生前本來の面目とも云つた。眞に這裏に徹底し得たならば長夜の夢から覺めた如きものがある。迷ひが夢ならば悟りも亦た夢である。眞箇の長夜の夢から覺めたならば、髮の毛一筋も残りはない。近頃の精神修養は流行物であつて、眞箇修養の志あるものと、無いものと玉石混淆ちや。徒らに其の叫び聲のみ

が等しく高いのである。然しながら、如何に修養したからとて、自己の根柢を明めな
 い以上は、それは形式に過ぎないのである。公案を貫つて參禪するにしても唯だ形式
 にのみ囚はれてしまふ。これではいかぬ。諸君が禪を修められるにしても、坊主のや
 うになつて貫はなくともよいので、要は、各自得られたところの力を、人々の職務の
 上に活用して貫ひ度いのである。軍人然り、政治家然り、實業家然り、學生然りであ
 る。佛陀の本懐も亦た此處にあると思ふ。坊主が世俗じみた事をなし、學者、實業家
 政治家が悟り臭いのも、甚だ感心しないのである。

六 乾坤唯だ一人

扱て、人々は、眞箇に「隻手」なり「無字」なり、「父母未生前本來の面目」なり、或
 ひは「生何れより來り死何れに向て去る」でも、何んでもよい。各自所持の公案に向
 つて一生懸命に參究するがよい。その中に屹度「ハ、ア成程」と徹底悟了する時節が

來る。此に到らば實に手の舞ひ足の踏むところを知らずちや。乾坤唯だ一人といつた
 境界。天上天下唯我獨尊である。併しながら、眞箇に自覺した目から見ると、此れも
 未だ／＼ホンの一步に過ぎない。自利的に此奴を擔ぎ廻つて居るうちは小乗初門の悟
 りぢや。利他的に活用し得て始めて大乘佛敎の本旨にかなふのである。佛の言葉で
 言ふと、「自覺覺他覺行圓滿」で、此の圓滿にして缺くところのなき境界にまで行か
 ねばならぬ。生死を透脱した丈けでは未だ悟りの第一歩である。妄想から脱出し得て
 悟りにクツ付いてまはる病氣は治つたが、病氣の毒が残つて居る。其の毒をも拂ひ去
 つてしまはねばならぬ。蘇東坡の詩にも

廬山烟雨浙江潮、

不到千般恨未消、

到得歸來無別事、

廬山烟雨浙江潮、

とあるが、一度び大悟の境界に到つたならば、悟りも忘却して終はねばならぬ。言つ
 て見ると誠に容易だが、さて實地にあたつては中々容易なものではない。眞面目に懸

命に参究しなければならぬ。眞箇に佛になつてしまへば佛はないぢや。佛境界に入ると同時に衆生界に出て自由自在に活動せねばならぬ。これが大乘教である。眞宗の經文にも「往相還相」といふことがあるが、極樂淨土へ行きつゝや再び娑婆へ歸つて來て衆生を濟度するのが大恩に報ゆる所以であると書いてある。他力の極端なる眞宗と、自力の極端なる禪宗とは全く別であるかの如くに見えやうが、それは外面に表はれた形式上のことであつて其の眞義に至つては、元來、佛法に多義なしぢや。

要するに、すべての修業者は、先づ己れの立脚地を自覺すると共に他を化し、自得したところの大法を大活現前せしめて、實地の學問や事業の上に應用し活用する心がけが大切である。百尺竿頭にチツとして居てはいけぬ。其處から翻身一番一步を進めてこそ、十方世界之れ全身になつて活潑々地の働きが出来るのである。

禪機とは何ぞ

一 囚はれざる平凡の生活

禪機とは、機輪縦横に、無功用の儘で切り廻すと云ふことで、或は棒、或は喝、さては毬を混じたり又を立てたり寸鐵人を刺すといふやうなことも、人を接する上には、禪機でもあらうが、老衲一人の見聞は、そんなことではなく、日常平凡なる生活を離れぬのである。何方かと云ふと囚はれざる平凡の生活である。併し、囚はれぬと云つても、殊更に洒々落落を粧ふのでは勿論ない。一體、禪の修業は、意思の力を剛健にするにある。意思が健やかになるに従つて、平常の行動が明白となる。着實なる。綿々密々となる。行住、坐臥、着衣喫飯の間に於ても、男に逢うては男、女に逢うては女、漢來らば漢、胡來らば胡、誰れに逢うても堅實に相應する。月も月、花も

昔の花ならば、見るものゝものになりけるかな。これを一面から見ると、極めて平凡なる働きのやうだが、其儘、禪機ではないか。棒や喝を行すのでも、格外の人に
行するならば禪機の一つかも知れぬが、今日の如く、科學的に、實際地に進んで行く
時に臨んで、殊更に作つた非常識なことをするのは、寧ろ過つて居りはせぬか。棒や
喝を行じなければ、禪の力が現はれまいと云ふ風に思つて居るのは間違つては居な
らうか。

意は毘盧頂額を坐斷し、行ひは童兒の足下を禮拜すると云ふことがある。此處をや
らねばなるまいぞ。眼、雲漢を眺め、足、地を離れずでなければならぬ。即ち、極端
と極端とが一になるのだ。佛と衆生と、迷ひと悟りと、天と地と、皆な、是れ、ビタ
リ一に歸してしまふのだ。物理學の上から言つても、精神學の上から言つても、此の
原理は一である。これを稻の穂に例へて云ふと、苗の間は頭も高いが、實のいるに従
つて、其穂は段々と頭を下げ、終には地に着くやうになる。實るほど土に手をつく

稻穂かな。禪の修業でも其通りである。禪の力は圓熟して、境涯が此處に到つたなら
ば、寝るも、起きるも、飯を食ふのも、廁へ行くのも、一擧手、一投足が皆な是れ禪
機である。禪機、世機、政機、或は商機と、名は種々であるが、一の力が萬事に相應
現したばかりである。「一月晋現」一切水、一切水月一月攝」ちや。丁度、「機」は
樞のやうなものだ。豫め、斯うして轉じようの、彼して轉じようのといふやうな意識
はない。轉じて居る其儘が、法にも囚はれず、形式にも囚はれず、唯だ自然の儘だ赤
裸々だ。露堂々だ。

二 正と奇とを轉倒する勿れ

天地自然の儘ならば、時には雪を降らし、雨を降らし、雷鳴もすれば颯風も起こさ
うが、是等のものは一の「變」である。「變」あらば「常」あり、「常」があるから「變
も現はれるぞ。始めから「常」なくして「變」を現はすは自然の儘でない。爲變であ